

# 阪神大震災 —生死をさまよって—

英文学科4年 松村 麻里砂  
(東灘区在住)

神戸を襲った突然の大地震、それは一瞬の出来事だった。初め、一体何が起こったのかわからなかった。大きな揺れですぐに目を覚まし、逃げ出そうとしたがもう既に何か落ちて来て、またすぐに大きく揺れた。気がつけば何かに挟まれ、動くことができなかった。

父はその日5時25分に起き、1本だけあった煙草を吸い終えてもう一度寝ようかどうしようかと思い、母が起きてくるのを待っていたらしい。母が着替えを済ませて部屋から廊下へ出たその瞬間、初期微動の余震があったと思うやいなや、かつて体験したことのない縦揺れの激震と、続いて激しい横揺れがあり、雷が辺り一面に落下したようなすさまじい音がしたという。

私だけ一階に寝ており、とにかく自分のいる場所を知らせなければと思い大声で叫び、周りのものを叩いたりした。真っ暗で何も見えなかったが、一緒に寝ていたはずの愛犬バースの名を呼んだ。何度も何度も呼んだが近くにいる気配もない。探したくても動けないので探すこともできず、すごく心配だったが、彼は5日後に無事見つかった。5日間もたった一人でどんなに怖く寂しかったことだろう。そして、2階にいた両親を呼び、弟や妹も無事であることはすぐに分かった。この激震は10数秒の出来事だった。そしてすぐに電気は消えたという。その後の状況はまったくつかめず、日の出の薄明かりで、家が2階の廊下を境に3つに引き裂かれているのがわかったという。そして、2階から何とか脱出しなければと思っていたところ、幸い父の部屋は無傷で、3階屋根裏にしまっていたナイロンロープが手に届くところに落ちていたのを父が見つけ、すぐそれを縄ばしごにして窓から下へ降りたらしい。

父は部屋にあったペットボトルの水、コカコーラ1ケース、トマトジュース、父の運転免許証、約200円のお金、薬、ラジオを持ち出し、他の家族は押し入れから父の上着を着たり、妹は父の老眼鏡をかけ、弟は父の予備眼鏡をかけて脱出したらしい。その後外へ出てみれば、北隣りの家は2、3階が吹っ飛んで、歩道と道路の方へ飛ばされていたという。

そうして皆が脱出する間、私は一人誰かが来てくれるのをじっと待っていた。

父がすぐに来てくれたが、私の周りはいろいろなもので覆いふさがりなかなか姿を

見せることができなかった。周りのものを少しずつのけていくうちに私の姿が見え、私は柱に両足大腿部を完全に挟まれて全く身動きが取れないことに気づき、父はすぐにもう一度2階の自分の部屋に戻り、ベージュのプリント合板にマジックペンでできるだけ大きく、

「娘大至急救出頼む」

と書き、道路沿いの見える所に置き、また私の所に舞い戻って励まし、トマトジュースを飲ませてくれた。その後すぐに、見知らぬ近所の方が2、3名救助にかけつけてくれたが、柱はびくとも動かないので車のジャッキを3台程持って来たりしたが、やはりどうにもならなかった。その後、レスキュー隊がチェーンソーで救出しようとしたが歯が立たず、私を放って何処かへ行ってしまった。今度は東灘消防団が来てくれたがまったく何の役にも立たなかった。あきらめ、また何処かの救助へ行ってしまった。そしてまた別の消防団が来てくれたがダメで、最後は父以外誰もいなくなり、父一人で何とか救助に必死になっていた。その間、父がコーラがいいか水がいいかと言うので、私は水を欲しがり、少しずつ私を勇気づけながら飲ませてくれた。冬の寒い日で、すごく寒くて、毛布をかけてもらい、ずっとそばで父が声をかけていてくれてとても心強かった。足はずっと挟まれたままで、初めはすごく痛かったがだんだんと感覚が麻痺していった。

「早く私を助けに来て！」

と心から願った。

当時は多くの人達が挟まれていたので、すぐに救出できそうな人を優先せざるをえなかったのだろう。私が助かるために残された唯一の方法はクレーン車しかなかった。でも多くの地域がこのような状態だったので、いつ私の所に来てくれるか、来ることができるかどうかさえも分からなかったのが不安だった。

余震はずっと続き、いつ2階が倒壊するかわからないという危険があったらしく、父は私の顔がつぶれたりしないようにと顔の上にピアノのいすや布団をかぶせてくれた。2階が倒壊すれば私も父も家の下敷きだ。その時父も死を覚悟していたと後から聞いた。

「きっと助かる」

と信じてはいたが、「このままもう死ぬのかな」とも「でもまだ死にたくない」とも、何度も何度も考えた。

「まだ私には、今までしてきたこと以上にやりたいことがたくさんある。このまま絶対に死ぬわけにはいかない」

そうしているうちに長い時間が経っていた。不安ではあったが、父がついていく

れたことが大きな支えであり、今思えば不思議なくらい冷静であったと思う。

そして、私にはまだ運があったのか、天の救いがやって来た。

正午すぎのことだった。クレーン車が来たのだ。それも神戸へ向かっていた大型クレーン車が、引き返しているところで偶然家の近くを通り、それを向かいの家の人が引き止めてくれたという。そして2階が倒壊しないように2階の梁を持ち上げ、次にまた消防団が来て私の脱出計画に取りかかったが、思うようにはかどらず、別の消防団もまた救助にかけつけてくれた。

そうして最後にもう時間がないということで、消防団の副団長が父に、「(私の) 命の保障はできないけれども、イチかバチかでやっていいですか」

と最後の救出作戦の了解を求めたということだ。父は即座に了解した。

そして、無事9時間後の2時44分にやっと救出された。

救出された瞬間からも父はそばでずっと「気を抜くな！」と言いつづけた。私も自身にそう言い聞かせ続け、意識がなくなったりしないように頑張った。

すぐに消防車に両親とともに乗り、サイレンを鳴らしながらなんとか甲南病院にたどり着くことができた。しかし、既にベットは満床で、私は出入口の床にそのまま寝かされ、すぐに点滴が開始された。その後10分も経たないうちに、隣りに寝ていた若夫婦の奥さんが、心臓マッサージのかいもなく亡くなり、その主人は子供のように泣きじゃくっていた。他にも周りでたくさんの方が亡くなっていた。唯一、父だけが携帯ラジオを持っており、多くの死者が出たという情報を得ていたようで、他のけが人もラジオを聞かせてほしいと頼んでいた。私はいつ家に帰れるのかと聞いたり、隣のベットを持って立ち上がろうとしたらしい。父の足をまくらがわりにし、父や母に、額に絶えず出て来る汗を拭いてもらっていた。足は腫れ上がりすごく痛く、自分で動かすことができなかった。しかし、父はわずかに私の右親指が動いたのを見て、大丈夫だと思ったらしい。

そして18日午後2時頃、やっとベットに寝かせてもらうことができたが、その頃はもう脈が人の手では測れなくなり、酸素吸入をしてもらっていた。体のどの部分にも静脈注射ができなくなって、点滴もできない、尿も全くでない状態になったという。父は心電図モニターを見ながら意識がなくならないように励まし続けていた。

夕方5時頃になって心電図モニターの心臓波形が衰えて来て、父がとても心配していたところ、2人の医師から両親は呼ばれ、このままでは助からないということで急ぎょ、淀川キリスト教病院に転送することが決まった。しかし、東灘区にはたった4台の救急車しかないのも、いつ来てくれるかわからなかったが、待つしかなかった。が、また運よく5時40分頃、救急車が来たのを知って、父がこれからのことを私に言

い聞かせた。

「とにかくお前の仕事は淀川キリスト教病院まで生きてたどり着くこと、そこまでだ、あとは病院がすべてやってくれるから」と。

6時、甲南病院の医師や看護婦達に見送られ、一路、大阪へと向かった。

途中、43号線を逆走して、カーナビゲーションで道を選びながら、無事7時30分に淀川キリスト教病院に着くことができた。父の話では途中、深江南町の43号線上の阪神高速道路の橋脚が完全にねじ曲がっているのをヘッドライト越しに見て、地震のすさまじさに驚いたと言っていた。道路も途中段差があり、救急車のナビゲーターは逆走中絶えず、

「緊急出動発令につき御協力願いたい!!」

と言いつつ、命がけで私を運んでくれた。

すぐに救急処置室に運ばれ、レントゲン、CTを撮り、その間6名の医者がベンチに座り込んで、ある人は泣いており、ある人は頭をかかえ、ある人は両手を組んでうつむいているのを見て、父は改めて事の重大さを更に痛感させられたようだ。その間、両親は何も飲まず食わずの状態、最後に医師に個室で手術の説明を聞き出すと同時に、父は右顎にけいれんがはしり、そのまま意識不明で倒れ、その後1カ月入院することになった。その為、母は18日の夜は外来のベンチで一泊した。父も私とともにICUに一日だけ入っており、ICUで目を覚ますと目の前のベットに私らしき女性が心臓マッサージを受けているのを見て、驚き、看護婦を呼び「私の娘ではないか」と確認したところ、違っていたようで、私は更にその隣りに寝ていた。

私が救出された時、両脚は丸太のように腫れ上がっていた。診断は「クラッシュ症候群」で、これは傷ついた筋肉から出る物質が、心不全や腎不全を引き起こす全身傷害だ。そして、淀川キリスト教病院で右足の壊死した筋肉を取り除く手術を受けた。その後、約3週間、1日2000～3000ccの出血が止まらず、輸血が続き、24時間透析で、口から人工呼吸器をつけ、両肩からはたくさんの点滴がされていた。大切なものばかりだったので、私が無意識にはずしたりしないように手足は縛られていたらしい。

ずっと高熱が続き、40度を越えた時には体中、氷づけにされていた。両親は毎日、2時と7時の面会時には必ず来て、時間ギリギリまでいてくれた。ICUでの1カ月間は全くと言っていいほど記憶にない。その時はちゃんと答えたりしていたので、家族は知っていると思っていたらしいが……。ICUでは生きているというより、機械に生かされているに等しかったという。顔はバルーンフェイスで体中2倍位に腫れ上がり、瞳は腐った魚のような目をしており、死人よりも死人みたいだったと父は言う。ICUの医師からは足の切断も考えておいてくれと言われ、腎機能は回復しない

だろうと言われていたことを後に聞いて、身の毛がよだつ思いだった。

2月16日、個室に移ってからの記憶はある。幻覚症状が消えず、何日か夜も眠れずにうなされた。怖くて、横で一緒に泊まっていた母を何度か起こした。昼間はいいのだが、夜になると眠れないという恐怖で怖かった。何日かすると落ち着いて来たが、3月半ばまで高熱が続き苦しかった。あれだけ長く続くと高熱にも不思議と体が慣れたのか、それほどしんどくなくなった。点滴は24時間ずっとしていたが、少しずつ飲み物から飲めるようになり、少しずつ食べられるようになり、うれしかった。

「生きててよかった」と。

1カ月も寝たきりだったため、体中の筋肉はすっかり落ちてしまい、スプーンを持つのもやっとで、おわん等を持つと手が震えた。体が棒のように硬直し、電動ベットを少し起こすだけでもしんどかった。そして、理学療法士の前田先生による本格的なリハビリが始まり、曲がらなかった体が曲がるようになって、ようやくベット上で座ることができるようになった。

その後3月末、前田先生に体を全部かかえてもらい、初めて車いすに乗って部屋の外へ出た時はうれしかった。看護婦さんも自分のことのように泣いて喜んでくれた。その日までは、部屋でリハビリをしてもらっていたが、次の日からリハビリ室での訓練になった。立ちベットで徐々に体を起こし、立つ練習をしていったが、足首が固くてなかなか曲がらず痛かった。前田先生に足の曲げ伸ばしや筋肉トレーニングをしてもらっていた。でも、足は自分の意志ではなかなか動かず、歯がゆかった。「動け！」と命令を送っても動かない。「自分の足のくせにどうして！」と、すごく辛かった。

4月に入って大部屋へ移った。初めは少し嫌だったけど、同じように足の悪い人が多く、「私だけじゃないんだから頑張ろう」とそれまで以上に思えるようになった。リハビリは痛くて何度も泣きながらしていたが、やったらやった分、必ず効果があることは身をもって実感していた。だからこそ、どんなに辛くても頑張れた。

「絶対、歩けるようになって歩いて家に帰るんだ。今ここでやらなければ、後からでは遅い。頼れるのは自分だけ、自分がやるしかないんだ」

と心からそう思った。

一週間ごとに少しずつよくなってきていたが、太股の手術の傷がまだ閉じていなかった（切開したまま縫わずに治療したので時間がかかった）、なかなか外出させてもらえなかった。そして、4月末やっと外出許可が出て外へ出ることができ、100日ぶりに愛犬パースに会えてすごくうれしかった。その後少ししてから、平行棒を持って初めて立った時は、

「立てたー」

と何とも言えない喜びだった。

それから歩く訓練に入っていったが、右足首が固いため、かかとのある靴を履き、ひざも弱いために装具で固定して練習した。震災から4カ月が過ぎて、やっと平行棒の中でなんとか歩けるようになり、少しずつ距離も延びていった。初めて歩けた時、目の前に希望の光が見えたような気がした。まだほんの少し歩けただけだったけど、もう大丈夫だとやっと思えることができた。車いすでの期間は長かったけど、歩き始めてからは早く、歩行器から松葉杖へとぐんぐんとよくなっていった。そして7月、やっと家に外泊することができた。神戸の家は全壊だったので、病院の近くの初めて行く家だったが、半年ぶりに家族とごはん食べたり、一緒に過ごせてうれしかった。次の日また病院に戻ってみて、病院の方が生活的には楽のような気がしたけど、やっぱり家族という方がずっといいと思った。その時、あともう少し、しっかり頑張っって早く家に帰ってみんなと暮らしたいとつくづく思った。

そして、2本だった松葉杖が1本になり、次は短い杖になりと本当に著しくよくなった。最初はおそろおそろ歩いていたが、だんだんと足の筋肉もついてきて、しっかり歩けるようになった。だいぶ歩けるようにはなっていたが、やっぱり右足首がまだ固くて、リハビリに行くたびに前田先生に曲げてもらいすごく痛くて泣いた。そうやっているうちに、とうとう杖なしで歩けるようになり、家族はもちろん、前田先生、看護婦さんや主治医の先生も、みんなすごく喜んでくれた。

私が家に帰れる日も近づいてきた。日曜日はリハビリがないので、その日を利用して外を歩いたりもした。室内とは違って、やはり外の方が足への負担が大きく、すぐに疲れた。しかし、それを繰り返していくうちに持久力もつき、10分、20分……と歩ける時間も延びていった。リハビリ室では筋肉トレーニングのほか、階段、エアロバイク等もして、プール訓練で水の中で歩行練習もしていた。それ以外にもたくさんのリハビリをして、その成果で9月2日に私の念願通り、杖もなしで歩いて退院することができた。7カ月半もの長い間だったので、看護婦さん達と別れるのは少し寂しかったが、みんな「本当によかったね」と喜んで見送ってくれてうれしかった。

こうして長い病院での生活を終え、今は家族とともに暮らしているが、当時のことを思うと、私にとっても家族にとっても夢のような幸せである。後に聞いた話だが、私が甲南病院にいる時からクラッシュ症候群であることがわかっており、できるだけ早く処置をしなければならなかったという。そのために多くの患者がいる中、若くてまだ体力が残っていた私を優先してくれていたのだ。私を迎えに来てくれた後は一台も救急車が来ず、2日後頃からヘリコプターでの転送が行われていたと聞いた。もし、あの時に運ばれていなければまず助かっていなかったことだろう。クレーン車が来て

くれたことといい、この救急車のことといい、本当に幸運に恵まれていたとしか言いようがない。回復しないだろうと言われていた腎機能も元通りになり、切断されていたかもしれない足も歩けるようになった。ICUにいる間、何度か危険な状態に見舞われたが、それも乗り越え奇跡的に助かった。ICUで私が苦しんでいる姿を見ながら父は、「よく頑張っている」と言っていたらしいが、それを聞いた時すごくうれしかった。私はICUでの記憶はほとんどないが、父をはじめ家族は助かるかどうかかわからないで苦しんでいる私の姿を見て、いたたまれない気持ちだったことだろう。その気持ちを思うと辛い、今こうして元気になったことが、何よりも家族への恩返しかもしれない。

こうして私が回復したのは、もちろん私一人の力ではない。多くの人の協力があったからこそだ。家族、友人、医師達、看護婦さん、理学療法士、近所の人達、消防団、レスキュー隊、他……。たくさんの人達に感謝したい。あの突然の大地震で5000人以上もの人が亡くなられた中、私は生死をさまよいながらも生き残ることができた。

多くの人の力で助けられた命、大切にしなければと思う。退院してからもまだリハビリは続いているが、また少しずつよくなって来ているので、これからはしっかりと頑張っ元のように走り回れるようになりたい。長い間苦しんだが、誰にもできない体験ができ、たくさんの人に出会えた。痛みというのは自分にしかわからない、そう実感したが、少しでも人の痛みのわかる人になりたい。この大地震での出来事は一生忘れられない、忘れてはいけないことであると思う。これからの人生、どんなに辛いことがあっても、このことを思い出し乗り越えていけることであろう。

# 東灘区で体験した震災

国文学科4年 小谷 久美  
(東灘区在住)

平成7年1月17日、あまりにも激しい揺れに目が覚めた。地震だとすぐにわかった。というよりも地震だと認識して目が覚めたと言った方が近いかもしれない。寝起きにもかかわらず、意識はかなりはっきりしていた。動揺もしたが、意外と冷静だったように思う。「地震や」とわかったと同時に、「これは普通の揺れ方じゃない」と思った。そしてこれは夢ではなかろうかと疑った。ふだんは寝起きが悪い私なので、その自分が目が覚めて意識がはっきりしているなんて、きっと夢だろう、と。しかし現実はいくらにも厳し過ぎた。ベッド（高さ1メートルほどで、四方に柵がある）の中を右へ左へと激しく転がされながらだんだんと揺れはひどくなり、このままではベッドから放り出される、と感じてとっさに柵につかまった。それが精一杯の“揺れへの抵抗”だったのだが、つかまった瞬間左手の指に激痛がはした。柵と壁の間で指をつめたということぐらいはすぐにわかった。そしてもう片方の手で壁側とは逆の柵につかまった。それと同時になぜ左手の指は挟まったのだろうかと思った。ベッドの柵と壁の間にはすき間があり、そのすき間は、ベッドの脚が柵より外側にあるのと壁の柱が少し突出しているために、決してせまくなるわけがないのである。にもかかわらず指がはさまれたという現実には、私の頭の中を一気に混乱させた。一体いま何が起きているのかわからなくなった。ますます夢であって欲しいと願った。

揺れがおさまってからこれもこれが夢であることを祈った。「夢なら早くさめてくれ」と思った。揺れが止んだので、起き上がってベッドから下りようと電気をつけた。が当然つくわけはなかった。ガスの臭いが部屋中に充満していたのでとりあえず窓を開けたら、何と外気の方が室内よりもはるかにガス臭かったのである。私は一層混乱してきた。そして極めつけが近所の女の子の「お母さん！ 屋根がない！」という悲鳴に近い声だった。もうますますわけがわからない。一生けんめい頭で整理しようとするほど、混乱への一途をたどるだけだった。

ベッドから床に下りて驚いた。足の踏み場がないのである。妹の「この床、穴あいてる」と叫んでいる声にも驚いた。その時私は、床に穴が開いているという本当の意味を分かっていなかった。せいぜい片足をつっこむぐらいの穴だろうと考えていた。それまでの常識では、そうとしか考えられなかった。妹が、「お姉ちゃん、こっちに



来れる？」と言いながら、私の部屋の入口まで来てくれた。私は、「うん、大丈夫」と返事をしながら、めちゃくちゃにちらかっている畳の上を物を踏み分けて歩いた。妹が先に歩いて階段を下りようとしたらしい。しかし「あかんわ。階段途中までしかない」の声である。もうこれこそ究極である。ここまできると、頭の混乱もおさまってくるというものだ。あまりの非現実的に常識で対応しようとするからわけが分からないのであって、聞いたり触れたりしたことをそのまま受け止めると冷静になれるらしい。自然に、知らず知らずのうちに、非現実を現実として受け止めるという思考回路に変わっていったようだ。

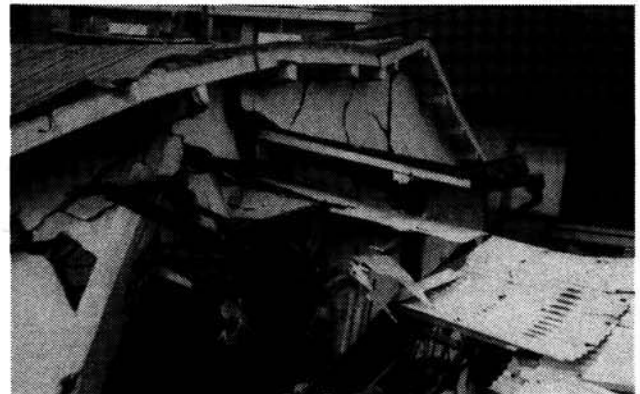
階段がだめなら、ベランダから出ようと思い、そこへ続く両親の部屋に入ろうとした。その部屋の床に穴があいていることは妹の叫び声から分かっていたので、柱につかまりながら片足を踏み出してみた。確かに床はない。この穴をとびこせばベランダから出られると思い、どこまで穴があいているのか、穴の大きさを測ろうと足を伸ばした。しかしどんなに精一杯足を伸ばしても穴の端はない。裸足に触れるのは空気だけである。仕方がないので、これまためちゃくちゃに家具などが倒れている妹の部屋を通過して、部屋の窓から外に出た。暗がりの中、屋根の上を足先の感覚を頼りにそろそろと歩いて、ガレージの屋根までたどり着き、そこから隣の家の車庫の屋根の上に飛び下り、やっと地面に到達した。屋根の上を歩いている時に、父が「お姉ちゃんとおっこ（妹）、二人とももう外に出た?!」と叫ぶ声があったので、「うん。もう出てるから大丈夫」と返事をして歩いていき、道路に降りてからは、家族が出てくるのを妹と二人で待っていた。じきに祖母が現れ、続いて母が、そして父も出てきた。しかし祖父がいない。父は祖父を探しに家の奥へ戻っていった。しばらくして祖父と一緒に父が戻って来た。これで家族6人が無事そろった。が、我が家にはもう2人(?)大切な家族がいるのである。1羽のジュウシマツ(↑)と1匹の犬(↑)である。ジュウシマツの方は鳥かごとと持っていかなければならないので、あきらめた。といっても見殺しにしたわけではない。ベランダにいたので、とりあえずはそのままでも大丈夫なので置き去りにしたが、数日後には、私の親友に預かってもらうことができた。犬の方はというと、こちらもまたベランダにいたのだが、鳥がいたのとは別のベランダであった。鳥がいた所は床面が一応水平だったのだが、犬がいた狭いベランダは、家の外壁との継ぎ目からポッキリと折れ、見事45度に傾斜していた。犬の名前をいくら呼んでも返事は聞こえず不安な思いでいると、近所のお兄さんがベランダへよじ登って犬を探してくれた。「あ、おる、おる」という声にどれだけ安堵したことか。そのお兄さんが犬を抱いて助けようとしてくれたらしいのだが、それまでおびえて声も出なかった我が家の愛犬、茶太郎は、突然知らない人を見て吠え出した。その声を聞き

て更に安心した。結局そのお兄さんではどうにもできないので、飼い主である私がベランダまでよじ登る破目になった。たどり着いても、何せ床が45度に傾いている為、どこかにつかまらずにはとてもじゃないけれど、立ってられない。そんな体勢のまま目を凝らして探すと、茶太郎はいた。折れたベランダと家の壁の間に出来た隙間におちていたのだ。そこから無理矢理引きずり出し、片腕で抱きかかえ助け出した。これでやっと家族全員無事だったわけである。近所には犬を飼っている家が多かったので、みんなお互いの家族の安否をたずねると一緒に、犬などのペットの安否も気遣った。我が家の茶太郎はもちろん大切だが、近所の犬たちも、その飼い主の御家族と同様心配だった。しかしその犬たちは、みな飼い主たちに連れられていたので、ほっとした。

さて、徐々に夜が明け始めたが、まだうっすらと暗い中では、視力が悪いのも手伝ってよく見えない。家から脱出する時に、コンタクトレンズも眼鏡も手さぐりで探したのだが、見つけれなかった。両眼ともに0.02しかない視力が、この時ほどどうらめしく思われたことはなかった。おまけに体は寒くて震えるわ、足は素足で凍りそうだし、本当に地獄に墮とされたかのような思いをした。やっと風景が見えるほどに空が明るみ、初めて事の重大さがわかってきた。

我が家の1階部分は高さが半分ほどになっている。そしてそこに隣りの家が寄りかかって来ており、そしてその隣の家も又同様に…。もうまるで、家の将棋倒しである。向かいの家なんかは、2階部分がきっちり90度回転してしまっている。つまり、一方の壁が床に、その反対側の壁が屋根に、そして本来の屋根は壁になっている。(屋根と地面は垂直になっていた。) あちこちの壁が倒れ、電信柱は折れ、傾き、電線はちぎれて垂れ下がり、地面は陥没し、歩道の端はくずれ、遠くの方では煙が上っている。本当にめちゃくちゃだ。これだけの地獄絵とも言えよう光景を目にすると、驚愕のあまりに涙すら出ない。

明るくなってから再び家の中へ入って



ベランダから。  
左下の黒い部分が、両親の部屋に入る入口



全景

みて、更に驚く。踏んで歩いてみた部屋を実際見てみると、想像以上に物があふれ出している。押し入れの物は全て部屋にとび出し、床は傾き、壁と柱の間の隙間からは外が見える。食器棚、冷蔵庫、テレビ、たんす、机など、家具という家具は全て倒れていた。階段は4、5段下りたその先はくずれて、がれきで埋まっていた。最もひどい状態だったのは両親の寝ている部屋で、ここは4畳半の部屋だったのが、そのうちの3畳分が1階におちていた。要するに両親は2人共倒れてきたたんすの下敷きになったまま畳ごと下にぬけおちたのだ。妹が言った“穴”とはこれほど大きな“穴”だったのである。畳3枚分、約5平方メートルの穴である。道理で、どれだけ足を伸ばしてみても穴の端っこはないはずだ。更にその部屋の真下で祖母が寝ていた。

祖母にしてみれば、突如として上から天井、床、畳、家具、父母が降ってきた、というわけだ。しかし祖母は奇跡的に無傷で助かった。母は倒れてきたたんすで足の指を骨折したが、それだけですんだ。父も脱出する時にガラスか何かで足を切ったらしく、血は出ていたが、他はほとんど無傷だった。妹はというと、部屋の家具全てが四方から中心に倒れてきて下敷きになったが、火事場の馬鹿力というものだろうか、自力で脱け出した。そうしなければ他に助かる道はなかったからだ。妹が助かったのは、すべての家具が覆いかぶさるようにして倒れたなかで、空いていた50センチ四方ほどのスペースが、ちょうど枕のある部分だったので、頭や顔を打たずにすんだ。これも運がよかったのだと思う。祖父の部屋は1階であったが、ベランダの真下だったので、部屋はつぶれず、また家具も倒れなかったので、これまた無傷だった。後々考えてみると、すべてにおいて運がよかったとしかいいようのないことが多い。

我が家族は、幸い避難所での生活は丸2日にとどまり、その後芦屋の父の知人宅に丸3日ほど、そして悪夢の日から約5日後には、大阪市の長居の寮に入ることができた。2月5日には、我孫子に移り、借家住まいを始め、そこで約10カ月過ごした。

昨年12月に無事神戸市東灘区の新しい自宅に帰って来ることができた。それもこれも、すべて友人、親類、知人たちのおかげだと思っている。彼らの協力があったからこそ、私たちはここまで立ち直ることができたと、心底感じている。



震災にあった旧宅

今回の阪神・淡路大震災で学んだことは、自然という力の恐ろしさ、資源・物資の大切さ、人の命の尊さ、そして最も身に沁みたのは、友人の暖かさである。物やお金も大切だろう。しかしそれ以上に精神面で友人から救われたところが大きい。

「持つべきものは友人」である。

# 避難所での生活

国文学科4年 勝原知  
(長田区在住)

1月17日の朝、大きな揺れで目が覚めた。

ふだんは2階にある自分の部屋で寝ているのだが、その日はたまたま1階のこたつにうたた寝をしていた私は、気がつくとすぐにこたつにもぐり込んだ。数秒でこたつは切れ、揺れの大きさが普通じゃないのに驚き、築30年余りの木造である家は「ガシャガシャ」と音がして、私はその時、「家が壊れる!」と感じた。暗闇の中での激しい揺れに恐怖を感じ、頭の中は真っ白だった。そのうちに揺れが止まり、それとともに私の名を呼ぶ父の叫び声が耳に入ってきた。2階に寝ていると思っていた私が、近くにいるのを確認して安心したものの、父の声の調子は普通ではなく、動揺しているのがわかった。

懐中電灯が見つからなかったので、まったく周りが見えない。家族3人しっかりと手をつなぎライターを探そうとした時、プーンと灯油のにおいがしてきた。玄関においてあった灯油のポリタンクが倒れ、一面に灯油がこぼれているようだった。

その時、外から近所の人声がして、外に出るように言うのを聞いてやっと「家にいる方が危い」と気づいた。そして玄関を開けようとしたが、大きな揺れで家は歪み、父がどんなに体当たりしても開けなかった。

2階から出ようと思い、階段をのぼろうとしたが、暗闇の中で階段はずれ落ちていて、危険な状態でとてもものぼれそうではなかった。

ありとあらゆる戸があかなくなっていて、「とじこめられた」という恐怖で体の震えがとまらない。結局、大きなガラスのある戸を父がピアノのいすで割り、家族全員が外に出ることができた。

パジャマ姿で、毛布を頭からかぶり外に出ると、長田の山の手にある私の家の外から長田の町が見渡せた。一面火の海で、煙がモクモクと出ていてア然とした。まるで戦場を見ているようで、あの一瞬の間にこんなになっているとは……。

とりあえず親戚の人達に連絡しようと、公衆電話を探すため近所を少し歩いてみた。

どの家も、傾いていたり、私の腰ぐらいまでにくずれていたりして、信じられない光景の中を通り、つくづく被害の大きさを実感した。もちろんどこまで行っても電話は通じず、車で親戚の家へ一時避難することにしたが、車の中からすさまじい勢

いで燃えている町をみると、とても自分の町とは思えません。ガラス越しに火の熱さを感じ、何とも言えない気持ちでした。

そして次の日から私達は近くの体育館での生活を強いられることになりました。

友達の安否を確かめるためにいろんな避難所に訪れ、無事だったことを喜びあった。

その時に通った道は家の焼けたこげくさいにおいが充満し、一面が焼け野原で、それを呆然と見つめている人を見ると胸が痛かった。

私の家は、1階が平行四辺形になる程度でしたが、もちろん住むことはできず、自分の住む所がなくなってしまった。

しかし家族全員が無事だった事に何よりも満足していたので、家がダメになった事は全然ショックではなかった。だから、明るくふるまう事ができたと思う。それに、避難所では周りの人全員が頑張っていたので泣き事なんか言えはしない。

もちろん生活は急変し、水もガスも閉ざされた毎日は不自由で、寒い中運動場まで行かないとトイレはなかった。

そして1番問題とされていたプライバシーはまったくなかった。

4ヶ月間のこの生活は一言では言いつくせない。

思い返してみると、つらい事もたくさんあったが、それ以上にうれしい事や感謝した事があって、思い出しても苦痛ではない。なによりも神戸の被災民を助けるために、多くのボランティアの人達がかけつけてくれた。

炊き出しをするために遠くからわざわざ来てくださった人、私達を元気づけるために演奏をしてくれた人、他にもたくさんの人に勇気づけられた。

「たいへんやったなあ。僕らこんな事しかしてあげられへんけど、頑張るんやで！」

「負けたらあかんで」

そんな言葉の1つ1つが今でも忘れられないぐらいうれしくて、「ありがとう」と言いながら涙がこみあげてきた。

初め無気力だった私達が、ここまで頑張ってきたのも、そんな人達の支えがあったからだと思う。

震災後8ヶ月以上たち徐々に神戸は復興しているが、現在でも元の生活に戻っていない人がたくさんいる。

私自身仮設住宅で暮らしていて、早く元の生活がしたいと思う毎日である。

今のところ先の見通しはきいていないが、今までの頑張ってきた事や、多くの経験を糧に、これからも前向きにやっいていこうと思っています。神戸の復興と共に私達も戦い続けます。

# 私を変えたもの

国文学科2年 賀藤 邦子  
(須磨区在住)

グラッ。大きな揺れを感じた瞬間、地震だと思った私は、掛け布団に潜り込んだ。何秒かすると揺れは止まるが、またすぐに揺れ始める。揺れるたびに家具が倒れてくるようだ。ガシャン。蛍光灯が床に落ちたらしい。

隣の部屋から母の声が聞こえ、少しほっとして、窓に手を伸ばすと、鍵がかけてあった窓が少し開いている。そっと開けてみると、外灯の薄明りでぼんやりと外が見えた。裏の家は築後4年にもかかわらず、1階の南側がつぶれ、斜めに傾いていた。先程から聞こえていた叫び声は、この家からだとわかった。揺れは間隔をおいて何度もやってくる。布団に潜っている時、このまま家が南へ倒れていくような気がした。「もう一度大きな揺れがきたら私は死ぬのだろうか」胸が苦しかった。「いざとなったら、ここから飛び下りよう」さまざまな考えが頭の中を駆けめぐる。冷氣と恐怖で体がガタガタ震えていた。

「一刻も早く外へ」

しかし、床はガラスの破片だらけのはずで、身動きできなかった。母は部屋を抜け出し、下へ行くと言った。1人、2階に残された私。下から弟の声も聞こえてきて、無事が確認された。「助けてくれ。女房と子供が生き埋めや」ずっと続く男の人の声。「あの人は死んでしまうのだろうか」と考えただけでも恐ろしかった。やがて、懐中電灯の光が見え、消防隊の人が何人かやってきた。しばらくすると、「助かりました」大きな声が聞こえた。本当にほっとした。そして、「もう、閉じ込められてる人はいませんか」と言われた時、私は助けを求めようかと考えたが、裏へ救出されているうちに大きな揺れがきて、母や弟とはぐれたらと迷っているうちに、消防隊の人達は行ってしまった。それから少し心に余裕ができ、外の明りで部屋を見回すと、机・本棚・タンスがベッドに倒れかかっている。枕の辺りを触ると、本が散らばっていた。外はしんとしている。人の気配がまったくなくなった。

ようやく、母が戻ってきた。しかし、部屋の扉が開かないと言う。私はまた、閉じ込められるという恐怖に襲われた。扉の手前にある棚の上の箱が落ちて、つかかっていたらしい。母が力いっぱい扉を押しているうちにやっと開き、ベッドの上で取ってきてくれた靴を履くと、タンスの背を踏んで踊り場に出た。ライトで照らし、階段

を下りてゆく。玄関の扉もやはり開かないということで、弟の部屋から出ることになった。ここも家具が倒れ、物が散乱している。近くにある服を何枚も重ね着し、窓を開けようとしたが、サッシがゆがんでいるらしくなかなか開かない。

やがてお隣の人が外から開けてくれ、外へ出られた。近所の人達はすでに脱出していて、みんな無事だった。8枚も着ているのにまだ寒い。だんだんと日が昇りはじめ、辺りを見回すと、ほとんどの家が一応立っている。家の前の道路は亀裂が走っていて、ガス臭かった。しばらくして、旅行中と聞いていた一人暮らしのおばあさんが、閉じ込められていることがわかり、警察に連絡に行ったが、申し込み順ということで救助の人はなかなか来てくれなかった。下敷き状態でないとは言え、いつ崩れるかわからないのに。1時間に2・3回くる余震のたびに、道の真ん中に集まる。また、少し大きな揺れがきたら、私の家も崩れるかもしれない。今にも落ちてきそうな瓦や倒れそうな塀に、私達は気が気でなかった。結局、おばあさんが救出されたのは3時間以上経ってからだった。

私達は何時間も茫然と家の前に立っていた。それから、お隣の車に入れてもらい、おにぎりとお茶をいただいた。みんな黙々と食べ、カーラジオに聴き入っていた。震度6。まさか。あちこちから、さらに大きな被害状況が伝えられる。この現実が信じられなかった。東の空に見える煙は、板宿商店街と鷹取市場の火事らしい。時々、灰が風に乗って落ちてくる。大津に出張の父はまだ帰って来ない。公衆電話には長い行列ができ、十円硬貨でしかかからなかった。回線が混乱しているらしく、何度目かに祖母と通じ、北区があまりひどくなかったと知り一安心した。信号はもちろん止まり、歩道を通り越して道路にまで崩れ落ちている家もある。

夕方、近くの女子高の記念館へ行くことにした。すでに200人近くの人がいて、ほとんど隙間がなく、一畳半に3人で座った。家から持ってきたカーテンと毛布を敷いても、大理石の床は冷え冷えする。18時頃には外が暗くなった。食糧はクッキーとおかきとりんごだけだ。物が散乱していて台所までは行けなかった。何もすることがないので横になったが、寝つけなかった。たびたびくる余震。この建物も壊れないという保証はないのだから、常に逃げることを考えていた。コートを着て、靴を履いたまま、夜中になっても眠れず、「もしも、このままみんなに会えなかったら」と考えると涙がこぼれる。あの人にも、この人にも、もう一度会いたい。父のことも気がかりだった。火事はまだ止まらないという。須磨警察近辺に避難勧告が出た時、家まで火がきてしまうかもしれないと思った。自分の家が燃えているところが頭に浮かんだ。「火が迫るまでに取り出すとしたら、お金で買えない物と言えよ」こんなことを必死で考えていた。ラジオ神戸はオールナイトで地震情報をやっている。トイレは断水で



汚物があふれていた。余震のことが頭から離れない。トイレでさえも一人で行くのは嫌だった。ペンライトの明かりを頼りに寝ている人の隙間を歩く。時々、親戚や知人が車で迎えに来て、帰って行く人がいた。私はつくづく、親元にいてよかったと思った。

1 時頃、父は帰って来た。大津で地震のことを知り、たまたま西へ帰るタクシーを拾い乗り継いでたどり着いたという。途中、真っ暗な所を歩いたというのにけが一つなく無事だった。しばらくして、おにぎりの配給があった。県外から給水車も来て、10ℓのポリタンクがもらえた。そして、私はようやく、うとうとすることができたが、寒さと窮屈さですぐに目が覚めた。

死がすぐそこまで迫っているように思えた、長く暗い夜は終わった。まだ不安は消えないが、明るくなると少しほっとした。火災はまだ止まらないとか、緊急車が一般車のために立ち往生しているというニュースが入ってきた。新聞にも、炎に包まれた町の写真が載っている。一面トップの「兵庫県南部大地震」という大きな活字。自分が被災者になろうとは夢にも思わなかった。本当に現実のことだと信じられなかった。身に着けている以外何もないというのは、変な気がした。人が減ったため、4人が並んで横になれるほどのスペースができた。両親は家を見に帰ったが、私達は何もすることがなく、ぼーっと座っていた。眼鏡がないので不自由だ。やがて、ハイキング姿で中学の先生がお見舞に来て下さった。食べ物をたくさん持って避難所を回られるという先生。叔父も舞子から歩いて来てくれた。家は一応、立っているということだ。

昼前、ようやく救援物質も届き始めた。おにぎりや果物だ。そして、再び夜がやってきた。掛布団を一枚取って来たので、ほかほかと暖かくなった。余震もおさまってきたので、靴をぬいで眠った。渋滞のために真夜中に物資が届く。私達の所は小規模だったために、配給が行き渡り、もう食べ物の心配はなくなった。水もたっぷりもらえる。住居自体には被害のなかった叔母の家に行くという話もあったが、向こうも断水しているし、山の上なので食糧に困るかもしれない、と私達は悩んでいた。夜は相変わらず不安が募ったが、時間とともにほんの少しずつ恐怖が薄れていくように思われた。また、多くの人が引き取られて帰って行く。

3 日目の朝。こんなにも日光ありがたいことはなかった。明るくなると安心して、眠くなった。結局、避難所にずっといるわけにもいかないのだから、祖母の家へ行くことになった。4人で家に戻り、必要最低限の物だけを持ち出した。私は2階の自分の部屋へ行ってみたが、家具が倒れていて、何も取り出せなかった。土足で家の中に入るのとは、とても妙な気がした。どの部屋も家具が倒れていたが、南北と東西に置いた家具がお互いに支え合って空間ができていた。このために私達はみな無事だったのだ。

狭さゆえに命拾いした。あちこち壁板がはずれたり、サッシが吹っ飛んでいた。タイル張りのトイレとお風呂は完全にはがれ落ちていて、ぞっとした。考えれば考えるほど、運がよかったとしか思えない。ほんの少し何かが違うと思ったら、私達は間違いなく死んでいたのだから。

昼頃、自転車3台とショッピングカーで出発した。板宿の辺りでは火災の跡がはっきりと残っていた。見慣れた風景がまったく違った姿に変わっている。至る所で道が盛り上がり、亀裂が入っている。今にも倒れそうな家のそばを通る時は細心の注意を払い、常に逃げるのが頭から離れなかった。途中、タクシーが見つかり、弟と2人で乗った。板宿近辺はかなり被害が大きい。しかし、北へ行くほど被害は少なくなっていた。ひよどり台に着くと、外見は以前と何も変わっていなかった。両親は3時間半かけて自転車で到着した。そして、私達は3日ぶりに顔を洗い、歯をみがき、温かい食事をし、布団で眠った。

翌日には水も出始め、最低限の生活が戻ってきた。それから、往復4時間以上かけて自宅へ行き、少しずつ荷物を掘り出す毎日が始まった。そして、3週間後に空家を借りられることになり、2月下旬、押部谷へ引っ越した。夏までの仮住まいの予定が、自宅の工事の遅れにより、12月頃まで延びてしまっはいるが、現在一応普通に暮らしている。

私がこの震災で一番強く感じたのは人の温かさだった。今まで親しいお付き合いもなかった近所の人々がまとまったり、避難所でもみんながみんなのことを考えていた。救援物資、ボランティア、義援金、もっと目に見えない所でも、私はどれほどの人に助けられたのだろう。また、ふだんいかに便利に暮らしていたのかを思い知らされた。これは、いつの間にか自然を支配しているような錯覚に捕らわれ、身勝手なことばかりしてきた人間への警告だったのかもしれない。今まで忘れかけていた、人を思いやる優しさや自然の大切さを思い出すこともできた。落ち着いてから考えると、私は大切な物をたくさん失った。仮住居に運んで、置いておけないことはなかったのに、あの時は気が動転していたのと、家の解体が思わず早まったのとで、そのまま家に残してきたのだ。しかし、私はその代わりに今を精一杯生きることが学んだ。これからは、先のことを心配して何もしないのではなく、自分のやりたいことをどんどんやってみて、積極的に生きていこうと思う。そして、二度とあってほしくはないが、もしどこかで何かが起こった時は、私もボランティア活動をしようと固く決意している。

# 震災の日の朝

国文学科4年 吉山 暁美  
(須磨区在住)

地震が起きた時、勿論熟睡の真っ最中で、ものすごい衝撃が起こり真っ暗の中、目が覚めました。初めは何が起こっているのかまったく分かりませんでした。はじめ周りでものすごい音が響いているのが耳に飛び込んできて、あらゆる物が落ちているらしい音や、本棚のガラス扉が一斉になっている音、壁に何かぶつかっているような音、近所の家がガタガタ鳴っている音などが聞こえてきました。それで、床が大きく揺れていることに気づきました。

それでも私は地震が起こっているとは最初思いもよらず、蒲団を頭から被って丸まっていたのですが、頭の中はパニックで「何これ？夢？隕石か、飛行機でも落ちてきたんかな？トラックでも家に突っ込んできたんかな？」などと思いました。

やっと少し揺れたがおさまったように感じ、少し落ち着いて、「ラジオをつけよう。そうしたら、これが何か分かる」と思いコンポにはって行き、スイッチを押したのですが、つきませんでした。「停電！じゃあ、電気もつかへんの？」と思う間もなく、また大きく揺れたので、蒲団に戻り頭から被って震えていました。小学生の頃、一度明け方に大きな地震があり、その時母が、慌てて入口の戸を開けに行ったことなどを思いだし、「戸が曲がって出られへんようになったらどうしよう、開けに行った方がええかな」と思いましたが、恐くて動けませんでした。

ちょうど、私が寝ていた位置は頭のすぐ近くにガラス扉の本棚があり、左横は大きな洋服ダンスがありました。もし、これが倒れてきたら……小学校の避難訓練で教えられた「地震の時は机の下に入りなさい」という言葉が頭の中に現れ、実行しようと思ったのですが、寝ていたすぐ横が机で、机の下には大きな椅子があり、どけるのが大変で、その横の本棚からいろんな物が落ちてきていたので、反対側にあった小さなテーブルの中に頭を入れたのですが、あんまり頑丈そうではなく、逆に重いものがそこに落ちてきたら首から…とも思い、結局また蒲団の中でちぢこまっていた。今となっては大袈裟ですが、あの時は本当に「死ぬんかな」と思い、恐怖のあまり声も出ませんでした。そんなに長い時間ではなかったと思いますが、ものすごく長く感じ、その間に色々な事を考えたように思います。

最初は寝ぼけていたのと、気が動転していたのとで気がつかなかったのですが、揺

れる前に地響きか何かの衝撃が下から「ドーン」とあり、その少し後で揺れました。少しオーバーですが、体が上に浮き上がり、ちょうど床がトランポリンにのっているのと似ていました。これが縦揺れというものと後から知りました。私が今までに経験した横揺れで左右にガタガタと揺れてるのと、まったく違いました。未経験の縦ゆれのため、最初は、地震と思わなかったんだと思います。

しばらくして揺れがおさまり、裏の家の人が雨戸を開けている音が聞こえ、「他の人も無事なんだ」とホッとしていると、兄の部屋から物音が聞こえ、私の部屋を恐る恐る覗きに来て、「おさまったのに静かやから、タンスの下敷にでもなっとんかと思った」と言い、私が、「また、いつ揺れるか、わからんし暗くて恐かったから動かんかった」話していると、また余震がきてガタガタ揺れたので、兄の部屋にはタンスなど倒れてきそうな背の高い物はひとつもなかったもので、とりあえずそっちに行きました。とても寒かったので、揺れがおさまってから自分の部屋に蒲団を取りに行き、明るくなるまでじっとして、地震の恐かったことを話していましたが、その間も何回となく余震が続きました。

停電のため情報をとれないと思っていましたが、中学の技術で作った携帯の電池で動くラジオがあることを思いだし、そこらじゅうの電池をかき集め、なんとか使えないものかと思いながらスイッチをいれました。最初鶴越のほうで家がつぶれているというのが聞こえて、信じられませんでした。ラジオをつけたタイミングが悪かったのか、(後から知ったが、最初、神戸の震度は放送されなかったらしい)大阪や北陸の震度しか聞けなかったもので、神戸が震源地だなんて思いもよりませんでした。2番目に阪神高速の橋脚が落ちていることを聞いたように思います。被害の大きさに、聞いていて恐くなったのと、電池がなくなると困るので、しばらくして切りました。

私の家の付近は、外観の被害はほとんどなかったのですが、地震のあった直後、まだ日の出前で窓の向こう(長田の辺りが山の向こうに方角からいくとある)が暗いはずなのに、薄赤くなっていました。最初はなぜかわからず不気味でしたが、しばらくして黒い、煙のようなものも見えはじめ、大きな火事のせいだとわかり地震の恐ろしさを実感しました。

# 震災を通して感じたこと

国文学科3年 西田衣公子  
(垂水区在住)

1月15日、風は寒かったが空は澄みきった青空のもと、私は振袖を着てワールド記念ホールへと向っていた。もちろん成人式に出席するためだ。色とりどりの振袖の中でもみくちゃんになりながら、“私も20歳になったんだなあ”と実感しつつ、この数え切れない程の若者は、みんな20歳だと思うと不思議でもありおかしくもあった。まだ20歳という節目に対して漠然とはしていたが、神戸市長や兵庫県知事のあいさつなどを聞いているうちに、これからは大人扱いなのだとちょっぴり身の引き締まる思いはした。私にとって中学・高校時代の懐しい友人に再会して楽しい時を過ごしたり、いろんな人達に振袖を見せに行ったり、又、もう十代ではないんだなあという少しさみしい入り混った思いをした日であった。

しかし、まさかこの2日後にあのような、20年生きてきた私が経験した事のない、恐らくほとんどの人達がないであろう忌わしい出来事が起こるとは、一体誰が想像したであろうか。

あの成人式の日、集まった20歳の人達、そしてあいさつをしていた神戸市長や兵庫県知事も全く予測し得ないことであつたらう。

1月17日、私はその日提出するレポートを仕上げるために、朝早く起きるつもりで前の晩目覚まし時計を6時にセットした。目覚めの悪い私はいつも布団から出ないとボタンが押せないよう枕元から少し離れた場所に時計を置くのだが、その日はベルによって布団から出る必要もないまま、激しい下からのドーンという突き上げによって目が覚めた。ほんの少しの間があって一気に縦揺れから横揺れへと変化し、私はとっさに布団を頭からかぶりエビのように体を縮こませた。ガシャンとガラスやビンの割れる音、母の

「布団をかぶりなさい！」

という声を聞きつつ、“死ぬかもしれない！”という思いが、激しい揺れの中で私の心の中に何度も何度もこだました。

実際の地震の揺れは15秒ほどだったそうだが、私にはいつ止まるのか、いつ止まるのかと果てしなく長い時間のように感じられた。まだ余震の続く中で、しかし最初のような激しい揺れはこないだろうという予想のもとに、そろそろと布団から抜け出てふ

すまを開けてみると、暗いのでよくは見えないのだが、何かが散乱していて、一体どこにあった物が落ちてきてそこにあるのかさっぱり分らず、とにかく足の踏み場のないほどのちらかりようで、ガラス等も割れていることもあって、2時間ほどじっと布団にくるまっていた。妹や弟は別の部屋で寝ていたが、妹は足元に、棚の上に置いてあったCDラジカセが直撃してきて、いつもはそちらの方向に頭を向けて寝るのだが、その日に限ってたまたま反対の方向に寝ていたので、ケガすることもなく無事だった。弟にしても棚の上に並べてあるCD等、色々と物は落ちてきたが、布団をかぶっていたので何事もなかった。私は母と同じ部屋で寝ていたが、

「震源地はどこだろう？」

とか

「もう最初のような大きいのはこないよ」

など2人して寝ながら話し、妹や弟の部屋まで行けないので時折声をかけて、常に話をしていた。母が落ち着いていたこともあって、私達は特にパニック状態にならず、余震がくるごとにビクッとはしたが、最初の“死ぬかもしれない”という思いは消えていた。この間にも、外では大変な惨事となっていたわけだが、暗く電気も切れてしまっている状態では、何も見えないし、又何の情報も入ってこなかった。この“情報”という事に関しては何の入手方法もなく困った。だんだんと空が白んで明るさを増していくうちに家の中の状況も分ってきたのだが、さて、もう地震はこないのか、外の地域はどういう状態なのか、親戚や友人の安否はどうであるか等々、知りたいことは山積みなのに、第一の情報源であるテレビはひっくり返ってしまっているし、ラジオにしても電気がこなければ使えない、全くの無用の長物であった。普段当たり前のように使っていた物が使えないという不便に、はがゆさを感じる反面、自然の力の前に人間はなんて無力でちっぽけな存在なんだろうと思ひ知らされた。

電気は午前中のうちにくるようになり、すぐさまラジオをつけて、何から手をつけていいのか分らないほどちらかっている中で、とりあえず、自分の身のまわりのものから少しずつ片付けながらラジオに聞き入っていた。緊張した、そして少し興奮をおさえるかのような声のアナウンサーの報道によって震源地が淡路島であると知った時、皆一同

「えーっ！」

と声をあげた。家（マンション）のベランダから淡路島を見渡すことができる位置に私達は住んでいるのだ。まさかこんなに近いとは思わなかった。私の住んでいる垂水区は比較的被害が少なく、もちろん地域によっては全壊の家や、石垣が崩れて道路が寸断されてしまったなど被害が大きいところもあったが、私達はケガもなく又、家も

つぶれることなく本当に運が良く恵まれていた。しかし、このように思えたのもひっくり返っていたテレビをおこして配線し直して、ようやく外の地域の具体的な様子がわかるようになった夕方近くからのことである。

テレビによって映しだされた映像は目を疑うものの連続だった。まだラジオしか聞けなかった時は、死者何百人だとか、生田神社の石灯籠が全部倒れているだとか、断片的な事柄しか情報として流れてこなかったのも、自分の家を基準にして考えていたが、こんなにも広範囲に渡って、しかも私達の見慣れた街が見るも無残に壊滅している様子には言葉が見つからなかった。

そして大都市の象徴でもある高速道路が軒並み倒壊しているのには驚いた。多くの人がテレビで何回も見ただことと思うが、寸断された道路から、バスがぎりぎりの所で踏み止まっているという映像は見るたびに、背筋が寒くなる。実は私の父は単身赴任で週末になると神戸に帰ってきて、月曜日の朝早くにいつも家を出ていくのだが、時間的にはあの地震がおきた頃の時間にバスに乗っているのも、もし1日違っていたら父もあのような目に遭っていたかもしれないと思うとゾッとするのであった。

震災からの1・2週間は片付けや、水の確保や買い出しのためにあっという間に過ぎた。コンビニやスーパーに行っても棚には何もなくて、必要最低限の水や、パン、インスタント食品などが、御1人様2個までという制限のもとに売られ、客が殺到して混乱状態になると危険だということで、店の入り口にはロープがひかれ、1人出たら1人入るといった、今まで経験したことのないことを経験した。

一度、西宮の方に用事があって母と出かけた時も、リュックをしょって、スニーカーをはいて、代替バスに乗ろうとしてもあまりの人の数で歩いた方が早いと言われ、ほとんどの建物や家屋が倒壊しているがれきの中、その悲惨な事態を目のあたりにし、茫然としつつ、さながら戦時中の食糧の買い出しのように、みんな歩いた。ひたすら歩いた。

ある全壊した家の門の下には、花が供えてあり、多分子供だと思われる名前が書いて貼ってあった。普段、人の死というものにあまり接したことがなく、又特に深く考えた事もないまま過ごしてきた私にとって、5千人以上の方が亡くなられた中で、自分は助かって生きているという、私にとっては当たり前のことのようで当たり前でない事実気付くショックを受け、家に帰ってからも歩き疲れとその衝撃にしばらく座り込んでいた。

今回の震災によって、私が経験したことは、これからの私にとって良いことなのか悪いことなのかは、はっきりと区別することはできない。恐らくどちらでもあるように思う。震災によって、私達が失ったものはあまりにも大きいし、親や兄弟といった

肉親は二度と戻ってこない。

しかし失ったものによって得ることができたものがあるのも事実である。少なくとも私が20歳という節目に亡くなられた多勢の人達によって、生きることの大切さ・自分という存在について考える機会を与えられたのは、得難いものである。

もちろん軽々しく良い体験だったなどとは言えない。

しかし、自分を見つめ直す機会を与えられたことによって、将来私が大人として、社会人として生活していく上での根底となることは間違いないだろう。



# あの日々のこと

国文学科3年 匿名  
(西区在住)

1月15日日曜日。私の成人式の日。

朝から大阪へ友達に会いにゆく。東京から来てくれた人だ。しかし、会えないままに帰る羽目に陥った。残念だが仕方がない。

午後は神戸へ戻って神戸市主催の成人式に出席する。待ち合わせの時間に遅れて、友達が見つからない。探しながら会場の廊下を歩いているうちに、高校時代の同級生に会う。

東京に進学した人、まだ浪人でがんばっている人。卒業以来初めて会う人もいる。自分が20歳という実感もないままに、みんなで騒ぐ。

中学時代の同級生もちらほら見かける。卒業以来、実に5年ぶりになるのか。「久しぶり」と声を掛け合いながら、人波を渡る。アマチュアカメラマンのおじさんたちもたくさん来ている。着物姿を被写体にパチパチやってる。

ある同級生は私に「女って、むっちゃ変わるなあ。中学生のときと全然ちゃうやん」といった。「それは、お互いさまっ」と笑って返す。そんな風に見えるものなのか。

あたり一面20歳の男女が渦巻く会場。誰もが笑い声をたてて、旧友との出会いを楽しんでいた。『はつらつ』という言葉がもっともあう日だった。

その夜は東京から戻ってきた別の友人を囲んで、仲良しばかりの同窓会を開いた。総勢15名。お座敷ですきやきを食べ、二次会はカラオケに直行。くたくたになった私たちはそのまま友達の家泊まった。

1月16日月曜日。成人の日の代休。

寝坊すること甚だしい朝だった。朝というより昼。朝ごはんをみんなで食べて、一休み。

その後、成人式には招かれない20歳の友人と昼ごはんを共にする。私たちだけでする成人式のお祝いだ。近況を報告しあって、互いにホッとする。

次に会えるのはいつだろう。ゆっくり過ぎる時間の中で、私たちの誰もが抱いている不安。それを打ち消すように、笑う。

食事後、東京から来ていた友人を駅で見送って、私は家に帰った。無事に帰れますように。そのまま寝る。

夕方過ぎにおなかがすいて目が覚めた。忙しい2日間が終わった。1年も前から計画を立てたこの2日間。それくらい前から言い合わせておかないと、成人式の日はとても忙しいのだと思っていた。その通りに忙しかった。

11時を回って再び睡魔がやってくる。お風呂に入って寝ようと思った。が、寝る場所がない。

当時、私は2階にある自分の部屋とは別に、一階の和室に一人で寝ていた。自分の部屋は本だの雑誌だので占拠されていたため、避難していたのだ。(情けない)

ところが、その和室には座卓が置いてあるではないか。一人で持ち上げることは到底むりだ。あきらめた私は、座卓と一人掛けのいすの隙間に、こそっとふとんを敷いて寝た。母がそのずぼらさを笑う。

1月17日火曜日。夜明け前。

兵庫県南部を揺るがした地震は、もちろん私の家にもやってきた。神戸市といっても、比較的被害の少ない地域に住んではいるが、そんなものは関係ない。怖いものは怖い。

私の寝ていた部屋は、もともと客間だったのを画家の祖父が使っていた部屋で、ふだん私や妹が使う場所には決して置かれぬ、壺やら花瓶が置いてあった(私たちが割ってしまうから)。それらがごろごろ転がる。割れる。落ちた物もある。金属の音がしたときは、どうしようかと思った。

どうなっているのか、さっぱりわからない。暗いのが怖くて、とっさに部屋の明かりに手を伸ばしたが、ぱっとついて、ぱっと消えた。母も妹も2階から降りてくる気配がない。けれども、やはり暗いのは怖い。

私は懐中電灯を探しに立ち上がった。テレビが置かれている部屋を通り抜けて、台所のキャビネットまで歩けば懐中電灯はある。そう、自分に言い聞かせながら、暗闇の中、勘を頼りに歩く。

ところが、テレビもピアノも動いているから、思った場所に歩けない。しかも、いろんな物を踏みながらたどり着いたキャビネットの前は、書類が散乱している。足にはざらりとした粒がたくさんくっつく。思っていた場所に懐中電灯は見つからず、私は落胆して納戸に向かった。

あそこなら、あるだろう！ とにかく気持ちを奮い立たせなければ。

だが、納戸の前もキャビネットのときと同様だった。またしても書類が散乱しているのだ。

私はそれを母の仕業だと信じて疑わなかった。母も懐中電灯を探しに来たのだろう。

そして、ここまで散らかしたのだろう。さすが、私の母だわ、きっと懐中電灯は見つからないだろう。

私はふとんに戻ってひとりでドキドキしていた。余震は続いている。そのたびに、何かしらの音が部屋のなかで響く。嫌いなお化け屋敷にはいりこんだみたいで気持ち悪い。

そのうちに、母と妹が2階から降りてきた。案の定、懐中電灯を手にした者は誰もいなかった。

一人用の狭いふとんに3人ではいる。客観的に見ると、たぶんそういう状態だったのである。だが、私の気持ちは違った。寒いのに私のふとんを剥ぎ取るな、に尽きた。

目の前の出来事に気を取られて、震度なんてまったく気にしなかった。本来なら、つけるべきラジオを探すことも、思いつかなかった。玄関と和室の扉を開け放ち、逃げ道の確保をしっかりと、私は再びうつらうつらとしていた。あまりの寒さに風邪を引きそうなことが気がかりだった。風邪は万病の元だ。

空が明るくなってくる頃、私は目が覚めた。16日にたっぷり睡眠時間をとっていたおかげで、目覚めは良好。部屋に陽が射す前に、外へ出てみた。隣の人が心配して声をかけてくれる。実は、揺れたのが自分の家だけだったらどうしようか、この不安は吹き飛んだ。

朝の太陽は登り始めた。早いに、部屋の中も見えてきた。

私は、いつもはふとんの場所にあった座卓の周辺に目をやって、すぐに背けた。

テラコッタで作られた、裏表2面の少女の頭が台からとれて転がっている。その横にはブロンズ像が倒れている。いつも通りに寝ていたら、私の頭は…？

しかし、そのほかに壊れた物はとりあえずない。割れ物ばかり置いてあったが、転がるだけですんだようだ。

私は自室にあがった。まずは暖かい恰好をしたかったのだ。大きく壊れた箇所は見つからなかったが、階段の壁には細かく何か所もひびが入っている。そのくらいのことは気にしない。テラコッタの頭の方が恐ろしい。

どこか不安な思いで自室の扉を開けようとした私は、そこで大変な目にあった。床にも本を積み上げていたのが祟って、私の部屋の扉が開かないのだ。あきらめの早い私は、すぐさま妹の部屋へ行った。

いつもなら、決してそんなことはしない妹も、この日は貸してくれた。目前の難題は次々に片づく。いい傾向だ。妙な自信がわいていた。

朝ごはんは何を食べたのか覚えていない。そのとき男手のいなかった我が家は、ガス漏れ、漏電恐れて、それらを使う物は一切使用禁止になっていたはずだ。灯油ストー

ブも灯油漏れと、排気管の故障を恐れて使わなかった。

それからは、懐中電灯とラジオの電池探しをしていた気がする。書類をぶちまけたキャビネットと納戸は母が自分だけで片づけると言っていた。散乱したのは、地震の衝撃で扉が開いたせいだった。ちなみに、足をざらつかせた物は、塩だった。

10時を回って、やっと通電する。テレビがいきなり鳴ってわかった。そこには、誰もが驚愕した神戸市内の風景が写っていた。どのチャンネルも神戸市内の様子ばかりだ。我が家がこの地震のすごさを知ったのは、そのときだった。

自分たちの被害がかなり軽いことを知ったら、他の知り合いが気になる。すぐさま、東京の友人に電話を入れた。神戸市内の友人との連絡を、東京の友人を介して行おうとおもったのだ。情報を1カ所に集めれば、少ない回数でより多くの情報が手に入る。そう思ったからだ。今になって思うと、どうしてそんなことを思いついたのか、まったくわからない。

すぐ東京につながったおかげで、我が家の電話の調子は良好と言うことがわかった。続いて、西宮北部の親戚宅と連絡がつく。うちの数倍ひどそうだが。テレビの中に比べれば大丈夫。その後、西区の友人など、比較的被害の少ない地域の友人とは数回のコールでつながった。ただし、東灘区と西宮の祖父母は家と連絡がつかない。どちらも、老人世帯で避難するのも大変だ。

結局、東灘区の祖父母は西宮北部の親戚が見に行ってくれることになった。西宮の祖父は一人暮らしだ。心配だけども、連絡するすべがなかった。テレビの初期報道でも、西宮、芦屋の被害にはほとんど触れていなかったこともあり、『西宮は無事』ということに落ち着いた。

そうこうするうちに、近所の状態もわかってくる。新興住宅地の我が家の近辺には、板宿、長田のあたりから移ってきた人も多いのだ。被害の程度が大きい地区と連絡をとるために、あらゆる手段が考え出された。車から始まってバイク、自転車、さいごは徒歩だ。

駅のようにも知らなければ、と私は自転車を走らせた。駅前の店は閉まっている。駅では職員すら状況を把握できず、路線の途中で架線が落ちてきている、ということしかわからなかった。復旧のめどなし。

家に帰って自室の片づけに取りかかった。扉と壁の隙間から定規を入れて、少しずつつかえている物を外す。たまに電話が鳴れば、走って取りに行く。何をしているのかよくわからないうちに、時間がすぎる。

西宮の状況がわかったのは確か3時頃だった。いつも一人暮らしの祖父によくしてもらっている家の人から、電話があった。

話していた母の声が飛び跳ねた。私は妹と飛ぶように階段を駆け下りる。

『無事』を確信していた西宮は、ひどい状態だった。なにせ「家がぺしゃんこに潰れている」と言われたのだから。

電話を切って呆然とした。が、一方で妙に納得していた。あの家なら仕方ないよね、と思えるほどに祖父の家は傷んでいた。それを直さなかったのは、この我が家を建てるためだ。

「近所の家に避難したらしい」とのこと、その家に電話したがつながらない。第一、迎えに行く術もない。「と、とりあえず…」と、電話を何軒もかけ続ける。その結果、避難しているはずの家も、ぺしゃんこに潰れ、その奥さんは圧死、祖父の友人でもあったご亭主も重傷だった。

「どこにもいない…」電話したのは、私と母。何がなんだかわからない。テレビの行方不明や死亡者名簿にはまだ載ってない。日頃の体力や年齢から言って、避難所まで自力で歩ける可能性は低い。そんなことにばかり、頭が回っていく。

最初に教えてくれた人に、もう一度探してくれるように頼む。

さらに、私は西宮警察、西宮市役所、最寄りの避難所、と立て続けに電話した。どこもわからないという。

「私たちにもわかりません。被害の状況もわかりませんから」

はっきりそう言われて、頭がくらくらする。いざというときに頼りになるのは、公的機関じゃないのか。頭がくらくらしていたのは、ショックのせいばかりではなかったようだ。

地震があろうと、なかろうと夜は来る。アナウンサーの表現だけでは言葉が足りない、なんとも言えない夜だった。

夜になって、祖父はすぐ隣に避難していたことがわかった。すぐさま、その家に礼の電話を入れる。電話に出た祖父の声を聞く限りでは、元気そうだった。興奮状態にあったのだろう。もうすぐ、最初に連絡してくれた人の家に移るといふ。本来ならば、バス停まで歩くのもしんどいと言ふ祖父が、その家までは歩かねばならない。

祖父の家の周辺で残った家はすべてここ数年以内に新築した家だけだった。倒壊家屋の数が並じゃないから、車を出すこともできなかった。

祖父の安全が確保され、ほっとした私たちだったが、夜中まで起きてた。次の日からどうなるのか、予想できない。気持ちが高ぶって寝る気にもなれなかったのだ。

数日後、やはり日頃から懇意にしている人が、無謀だという周りの声を押し切って、祖父の所まで行ってくれた。そのまま我が家へつれてきてくれると言ふ。我が家は一気に明るくなった。女ばかり3人で暮らしているから、現金なのだ。

夕方過ぎに西宮を出た、と連絡があってから、我が家についたのは夜中だった。ほんとうにありがたい。そのうえ、祖父が無理を言ったらしく数点の絵も持ち出してくれた。

このときの気持ちは、正直言ってもう忘れてしまった。ひたすら感謝の念が残っているばかりだ。これからも、きっとこの感謝を忘れることはない。

1995年10月

実は、祖父の生死が不明になってからのことが、私にはよく思い出せない。ひたすら連絡を取り合っていた合間にも、断水のことや、おにぎりの差し入れ、食料品と水を手に入れるために何時間も並んだりしていたはずだ。なのに、それがいつなのか。時間がよくわからない。

特に食料は、車を出せないために駅前でしか買えず、しかも、一度に買える量ははっきりと決まっていたので、困ったはずだ。他の家庭のように気軽に買いに行けないのが、あれほどつらかったことは、あれまでも、あれからもない。そういう気疲れか、あの頃のわたしは4、5日で一気に数キロやせた。

祖父が帰ってきてからも、行政関連の手続きや家の解体など、しなければいけないことは、山積みだった。1つずつ片づけるしかなかった。1枚の書類を求めて、何時間もかかるのがあたりまえ。場合によっては何日もかかって、ほとんど疲れた。

親切な隣人には感謝した。

また、己の利のみを追求する隣人もよくわかった。覚えておこう。

1つずつ時と努力で解決していったことを、今後また繰り返すのは、もう嫌だ。願わくば、世界から地震がなくなってほしいと、強く願う。願ってもどうしようもないことなのに、そう思わざるを得ないのは、まだ私のなかの何かが地震のときのままでいるからかもしれない。1月17日から再び学校が始まるまでの約3ヶ月間。あの日々のは、よく思い出せないけれど、そして辛かったけれど、あのときの経験が良い意味で、活かされたときに、この体験を私が乗り越えられるのだろう。

今はまだ、途中のようなのだ。

成人の日に、無邪気にはつらつとしていられた私たちの未来は、あの地震でどう変わったのだろうか。

ときどき、無性にそのことを知りたくなる。

# 震災体験と親族の不幸

国文学科1年 五十嵐 昌子  
(伊丹市在住)

1995年1月17日5時46分、誰も予期していなかった大震災が起きた。

その時、父は体調を崩して入院しており、家には母と私と妹の3人がいた。3人も2階で寝ていたが部屋は別々だった。地震の直後、私は布団の中で目が覚めた。寝起きだったのとパニック状態だったのとで、その時何をしていたのか詳しく覚えていないが、とにかく机の下にもぐったり布団をかぶって叫んでいたのだけは覚えている。

地震がおさまったら、階段を挟んだ妹の部屋から母の声がした。

「早くこっちに来なさい！」

まだ暗かったし、いつ余震が来るかわからなかったので、階段を渡るだけで怖かった。私は無我夢中で隣の部屋へ行った。電気が止まってしまっていたので、3人で夜明けを待った。

明るくなってから見ると、妹の部屋は無惨なものだった。テレビが落ち、CDプレーヤーが落ち、鏡台が倒れていて、妹に物が当たらなかったのが不思議なくらいだった。しかし私の部屋は、物の配置のせいか、本とパズルの額が落ちていただけだった。今考えたら、なぜわざわざ危険な妹の部屋へ行ったのだろうと思うが、あの時は、とにかく誰かといたかった。

下へ降りてみたら、すごい事になっていた。食器棚が倒れ、本は散らばり、ピアノも数センチ動いていた。その日は学校へ行かず、1日中片づけをした。幼なじみの友達が、買い出しのついでに様子を見に来てくれた時は嬉しかった。

震災の2日後、以前から入院していた祖父(母の父)が危篤だと連絡が入り、母と私と妹は、広島県にある祖父の家に行くことになった。広島県といっても岡山県寄りの所で、普段は車で3時間ぐらいで着く。しかし、当然、車で行くわけには行かず、最初は飛行機で行くことにした。ところが切符が取れず、結局、兵庫県の北の方を電車で乗り継いで行き、半日以上かかった。祖父が亡くなり、葬儀を終えたのちも、伊丹市では水が出ず余震が続いていたので、しばらくは広島に滞在した。学校が気になってはいたが、電話してみると、授業もテストもつぶれていると知った。

再び伊丹に戻ってきたのは、震災が起こってから10日後ぐらいだった。それでも水はまだ出ず、私達は給水車に頼るよりほかなかった。母が父の入院している病院へ行っ

て留守の時に、給水車が来たことがある。私と妹がバケツとヤカンで水をもらいに行く途中で、近所のおばさんがバケツを貸してくれた。普段はそんなに親しくないおばさんもポリタンクを貸してくれた。ご飯を炊いて持って来てくれたおばさんもいる。嬉しく思い、近所の人達とのつながりは大切だと思った。

私の家族は誰も怪我をせず、家も壁に軽くひびが入ったり、物が動いたり落ちたりした程度ですんだが、私の親族の中には、もっとひどい目にあった人達がいる。

伯母（母の姉）が、夫と娘2人とで東灘区に住んでいた。東灘区は被害が大きく、伯母の家も崩壊し、伯母と下のお姉さんが下敷になって亡くなった。下のお姉さんは24歳だった。伯父は自力で脱出し、上のお姉さんはその時四国にいて被災しなかった。伯父の話によると、伯母もお姉さんも即死だったらしい。崩れた家の中で、伯父は伯母の手を握って見たが、何の反応もなかったという。2人の遺骨もほとんど拾えないほど、被害は大きかった。それでもどうにか葬式を済ませ、しばらくは知人の家に世話になっていたが、この間ようやく新しい家が見つかり、今はそこに住んでいる。

祖母（父の母）は、娘と2人で西宮市に住んでいる。西宮も被害が大きかったが、幸い住んでいるマンションは無事で（といってもひびは入ったが）、2人とも怪我はなかった。それでも水とガスが止まってしまい、特に水道の復興は遅れた。祖母の家は甲子園球場のすぐ隣にある。球場関係者の方が、グラウンドにまく水を解放してくれたので、よく水をもらいに行っていた。そうしているうちに伊丹で水が出るようになったので、洗濯をしてお風呂に入る為に、週末は必ず私達の家に来ていた。その時は、同じ西宮市内に住んでいる祖母の妹（父の伯母）も一緒だった。集まった時にみんなで震災の話をいろいろしたが、祖母の妹の話が一番印象深く残っている。祖母の妹は、地震が起こる十何秒か前に眼が覚めたという。ゴゴゴゴゴォと地面の下からものすごい音がしたかと思うと、突然激しい揺れがきた。何が起きているかわからない状態で、必死にベットにつかまりながら、「ああ、人間こうやって死んでいくんだなあ」と思ったという。今はもう3人とも毎日西宮で暮らしているが、今度、祖母の住んでいるマンションが、新しく建て直されることになった。経済的なことや、建て直している間はどこに住むかといった問題がでてきている。

震災の後私は結局、卒業式予行と卒業式の2日しか高校へ行かなかった。学校に行っていなかったのが遅れたが、芦屋に住んでおられた校長先生が亡くなっていた。

大学に通ようになってからは、だいぶ復興が進んではいたが不便な日々が続いた。4月から7月の間は、神戸電鉄の一部が開通していないため阪急線が使えず、JRで通っていた。全線開通してからは阪急線を使っているので、毎日のように西宮や長田



を見ているが、やはり壊れたマンションや青いビニールシートが目立つ。

この大震災で多くの方が亡くなり、多くの方が傷ついた。震災から10カ月以上経った今でも、テント暮らしをしている人達がいる。しかし、震災を通して得たことも沢山ある。ほんの些細な親切でも嬉しく思い、また思われることを知った。ボランティア精神が薄いといわれていた日本人が、決してそうでないことを知った。そして、命の尊さを知った。私はこれからも、この震災で経験した喜びや悲しみを忘れずに生きていこうと思う。

# 大震災が起きた時

国文学科1年 北田 真理  
(垂水区在住)

大震災が起きた日、私は床の上に転がって寝ていました。受験勉強中に眠気が襲ってきて椅子から転げ落ちてそのまま熟睡していました。大地震がおきた時、最初は誰かが寝ている私の体をゆさぶっていると思い、眠たかったので無視してまた寝ようとした時、体をゆさぶっているだけなのに周りが騒がしく感じて、やっとのことで大地震だと思い、飛びおきました。真冬の朝5時は真っ暗で、部屋全体がゆれていて私は無中で自分の部屋をでてリビングにいきました。私がリビングにきた時、私の家族はすでに集まって暗闇の中でけい帯ラジオをつけて次から次へと襲ってくる地震で緊張していました。その時私は外へ出ると絶対危険だと思って、家の中にとじ込めていましたが、後で家がつぶれて下敷になった方々のニュースを見て、もし家がつぶれていたら——。と、思ってぞっとしました。

地震のゆれと共にタンスの上のものや扉という扉が全て開いて中の物が床になだれおちていましたが地震の波の音がすごくて何かしようと思っただけでした。私の家は、文鳥とカナリヤと金魚を数匹飼っていて、そのうち文鳥はタンスの上の籐の籠に入れていました。私は、手さぐりで籐の籠を落ちた物の山の中から探して見つけましたが文鳥は見あたらず、壊れたブランデーのボトルに気をつけて、窓と机のすきまに文鳥をみつけとりだしました。さいわいけがもなくほっとしました。6畳の部屋が探している時はものすごく広く感じました。夜が明けて部屋が明るくなった時、絶句しました。タンスの上からおちたブランデー等のボトルが割れて中身が畳やその他の物にしみついていた。台所では、扉の食器棚の中身が床に落ちてガラス類は全て割れていました。水槽の中に電気がついたふたが落ちて、一匹の金魚の目に当たって、泳げなくなりました。風呂の浴槽やピアノ、エレクトーンまでも移動していました。震災から半年以上たった今考えると本当に恐ろしく、また地震に対する知識や非常時の準備を全くしていなかった事も恐ろしく思います。地震の起きた日は、昼過ぎまで家族全員で部屋を片づけました。翌朝になると電気が通り、テレビをつけっぱなしにしてニュースに見入りました。私は垂水に住んでいますが、ニュースをみるまでは、垂水が一番ひどいだろうと思っていました。神戸はめったに災害が起こらないので、これ以上ひどい事なんて考えられませんでした。ニュースでは、大阪に近い兵庫県の

被災地から順に放送していました。西宮や芦屋もひどかったですが、やはり長田区が強烈に心に焼きついています。地震の後、すごい勢いでたくさんの家を焼いた大火事は、テレビで見ている、水がなくてただぼう然と家が焼かれるのを見ている人をカメラが映すのは、あまりにも残酷に思いました。地震後、混乱を予想して直ちに道路を通行禁止にして、緊急体制をとり、空から物資を運んだり出来たと思います。政府や市長等の、予想もしない大地震で——。はないと思う。誰だって予想していたら防災体制をとれる。予想もしないのなら民間の代表者なのだから、迅速に対応すべきです。そういう対応ができていたら、どれだけの人が助かっただろうか。と思うととても残念に思います。迅速に対応する“ふり”ではなく、本当に真剣に取り組んでほしいです。震災から十数日間、高校が休みになり、高校3年の最後の試験も中止になりました。水道とガスが使えなかったのが日常生活にいろいろ害ができましたが、普段当たり前と思って使う水・ガスが、どんなに大切な物かわかり、それがなくなるとどうなるかわかり、恐ろしく感じました。でも、家族で水をくんで運んだり等で、きずなのようなものを感じました。水道は2月中旬まで使えなかったのが、2～3日に1回風呂屋に行きました。風呂に30分入るのに3時間程、外で待ちました。風呂屋は大勢の人がひっきりなしに入るので、塩素の臭いが充満しておちつかないので、週に1回、日曜日家族で加西市にある父の実家の風呂に入りに行きました。私は震災後5月ぐらまで夜に地震がこないかと心配で不眠症気味でした。2月、3月に5～6大学の入試があり、夜眠けが少なくて勉強できたのですが、夜いつもそばに衣食等を詰めたリュックを置いていました。予震が来るごとにドキッとしていました。食べ物も最初は心配で震災の日に父と車で明石までスーパーや食料品店に買い出しに行きましたが、菓子類以外、ほとんど買えませんでした。しかし、2～3日後には、スーパーに食料が入ってきて、助かりました。本当にもう大地震は2度と起ってほしくないけれど、私はある占いの本に五黄土星の年は地震が起きやすい年である。今年も五黄土星で、関東大震災や第一次世界大戦、第二次世界大戦がおこったのも五黄土星である。というのを読みました。本当かなあと思いつつ、今でもその本を読んでいます。

# スーパーでアルバイトをして

英文学科4年 前田 憲子  
(北区在住)

阪神・淡路大震災の前日、休日であったこともあり、私は就職活動の準備をしようと資料請求のハガキを書いた。この時はまだ、自分がどの様な職種に就きたいのかがはっきりとしていなかった。日ごとに深刻化している女子学生の就職難を念頭に入れ、とりあえずやれるだけのことをすればよいと考えていた。

次の日の早朝、寒さに目を覚ました自分の姿があった。今何時なんだろう。そう思った瞬間、物凄い地鳴りとともに部屋中が動き出した。あの時私ができたことと言えば、布団の中に潜り込むことぐらいだった。何時間と揺れているようにさえ感じた。

しばらくして電話が鳴った。兵庫県内に住む親戚からで、その時初めて震度を知らされた。震度6。どうしてそんなに大きな地震が神戸に？と思ったものです。ようやく時計の針が7時をさした頃、窓のすき間から明かりが照らし始め、父が雨戸を開けてくれた。私は落下物でまだベットから出られない状態だった。

そうこうしている間に、近所が騒がしくなってきた。お互いに無事を確認する姿が、とても暖かく感じられた。

「阪神高速が落ちたらしいよ」

「長田区で火事やって」

「今日はもう学校行かれへんで！」

誰もが興奮気味に話していた。この時点の私達には、あれだけすさまじい被害をもたらしたとは想像もつかなかった。

お昼頃、ようやく電気がつくようになった。それでまずラジオをつけ、テレビをつけた。ひどい映像が目に映った。これが神戸の街なのか。電車は全線ストップし、ビルが壊れ、延焼をさけるための水もないなんて。

千葉県に住む親戚から電話が入った。私が受話器を取った。心配しているだろうな！とは思いつつも連絡出来ずにいたのだ。

「何度電話かけてもつながらないから、どないしようかと思ったやんか！」

そう言って叔母さんは泣き出した。それ以来ほとんど電話は使えなくなってしまった。情報を受けとれない、また流せない状態の不自由さを身にしみて感じた。

夕方、雨戸を閉める際に六甲山を見た。六甲山を越えたはるかむこうの空に、黒い

煙が漂っているのが見えた。あれが長田区の火事かな？。身震いがした。たびたびある余震に、明日はどうなるのだろうか、と思わざるをえない1日であった。

次の日はアルバイト先に呼び出された。スーパーでアルバイトをしているため、震災後は休みなく働かなければならなくなった。地震当日のテレビでも放送されていたので、ある程度は覚悟していたが、予想通りの長い行列。何もかもがはじめてのことで、本当に怖かった。食べ物はガム1つまで残らず売り切れ、店内も店外も長蛇の列が出てきているのだ。何が買えるというわけでもないのに。みんな不安なのだ。すべての棚がからっぽになる風景は、まさしく戦後のフィルムを見ているようであった。夕方遅くに、ようやく全国からお菓子やパンなど、莫大な数の商品が入荷するようになり、ほっと安心したが、出しても出しても棚に残ることはなく、レジや誘導の方に人手を取られていたので、なかなか店出しが追いつかない状態が続いた。友達が私に愚痴をこぼした。

「男は全員、徹夜で店出しやって！オレかって、地震怖いのに」

翌日からスーパーの店内は全国からの応援を受け、次から次へと品物が入荷し、男性はみんな泊まりこみで作業をした。みんな眼が真っ赤になっていた。誘導もスムーズにいくようになり、やっと店らしくなった。私はレジを打ちながら、沢山のお客様から声をかけてもらった。

「この店が開いているし、商品もいっぱいあるからほっとするわ」

「北区のスーパー開いてるって聞いたから、長田から有馬街道を歩いて買いに来たんやけど、やっぱり来てよかったわ」

「お姉ちゃん達しばらくの間大変やろうけど、頑張るね。有難う」

そんな声を聞いて、喜びがこみ上げてきた。この時ほど、人と接する販売職に魅力を感じたことはなかった。今私がしていることは、一種のボランティアになるのだ。そう信じて私は一所懸命働いた。

毎日のアルバイトに疲れが出てきたのは、震災後始めて降った大雨の日。いつでも避難出来るようにと、準備に追われ心労が重なってしまったのだ。有難いことに、かかりつけの医者に見てもらえることが出来、薬ももらえた。インフルエンザにかかっていた。その結果、1週間寝込むことになってしまった。病気が治り、職場に復帰できた時には、不平を言う者もいなくなり、店全体が一つにまとまって、あわただしいながらも有意義な日々が過ぎていった。この頃から、私は主として販売職を中心に就職活動することを決意し、ひたすら資料請求をしはじめた。

やがて春になり、私の就職活動も本格化してきた。雨の中、ずぶぬれになって会社訪問し、暑い中、汗だくになって歩きまわった。震災が企業や私達学生に大きな影響

を与えたことがよく分かった。どうしてこんな思いをしないといけないのかと思いつつも、無我夢中だったような気がする。とにかく私には、お客様が見せてくれた笑顔が忘れられなかったのだ。

私は被災者ではないけれども、神戸市民の一人として、この阪神淡路大震災で大きな勉強をしました。今自分が何を求めているのか。それはお金や物などではなくて、人とのふれあいなのだと気付きました。

来年の春から、社会人として再出発です。大きな被害をもたらした震災の中から選んだ人生に笑顔で答えることができる様な人になるため、頑張っていこうと思っています。神戸の街に負けないように!!

# 地震について

英文学科2年 石田 麻紀  
(北区在住)

1月17日、朝。

私は、なんか、変な夢を見ていました。何かは、覚えていませんが、いつもとは違う変な夢でした。

その時です。いきなり、揺れたのです。ベッドが。

私は、「絶対に夢だ。今日は、本当に変な夢を見るな」と思っていたのです。しかし、夢じゃありません。「死ぬかも知れない」と思った瞬間、それが夢ではないことに気づきました。

その揺れは、今まで私が体験したことのないくらい、強いものでした。

でも、初めは、寝ているせいか、大したことのないように感じられました。特に、私の住んでいる部屋は6階、最上階だったので、「だから、これほどなのか」と思っていました。多分、寝ずに立っている状態だったなら、その揺れは、ものすごく感じたと思います。

私は、北区に住んでいて、そこで体験したので、それほど揺れも被害も大きくなかったように感じます。

知り合いで、被害の大きかった中央区と長田区の人がありますが、かなりすごかったそうです。

中央区の人は、「壁が崩れるのをはっきりと見た」と言っていました。長田区の人には、この人は、私のいところですが、「タンスが落ちてきた」と言っていました。

本当に、それくらい、強くて、激しい揺れだったのか、とあらためて思います。

上から物が落ちたり、壊れたりするのですから、ひどいものです。

たった、1分間程の揺れで、家が崩れるんですから。

私の友達は、御影町に住んでいますが、家は半壊しました。今は元気にしていますが、その時は、私の2～3倍も怖い思いをしたと思います。地震直後は、ぼう然としていたと思います。

私は揺れがおさまっても、ずっとふとんの中から出てきませんでした。

それから、しばらくして、友達から電話がありました。

その友達は、「どう？部屋の中。かなり、ひどいんちゃう？大丈夫？」と尋ねて来

ました。でも、その時、私の回りは、真っ暗だったのです。カーテンが閉められていたし、早朝ですから、外は真っ暗なのです。電気つけてみようとしてスイッチを押したのですが、停電してるのです。

今までふとんの中にもぐりこんでいたので、揺れている間は怖かったのですが、揺れがおさまってから、何も感じなかったのですが、闇の中に自分1人だけがいると思うと、すごく怖くなりました。

「電気は、つかないけど、多分、部屋の中は、何ともないと思う。大丈夫、ありがとう」とその子からの電話を切りました。

しばらくして、別の友達に電話をかけました。その子も私と同じ1人暮らしの子です。(私に比べると、かなり、しっかりしている子ですが。)

「まわり、すごそう？私のところは、そんなことないと思うんやけど。真っ暗で、何も見えんのやけど」と言うと、冷静な彼女は、「カーテン、開けてみてん？」と言いました。

時計は、6時30分ぐらいだったと思います。カーテンを開きました。日が昇ってました。まぶしかったです。最後まで、カーテンを開きました。大きな窓から、部屋に日が差し込んで来ました。

その時、私は、地震の現実を初めて知ったような気がしました。

「これは、本当に、自分の部屋なのだろうか？間違えて、兄の部屋に入ったのではないだろうか」その部屋を見るなり、そう思いました。

本だなの中の本は、全て落ちていて、ベッドが揺れて、テレビも冷蔵庫も、タンスも、すべて何センチか移動しているのです。

驚きました。タンスの上には、小さなサボテンを置いていたのですが、壁ぎわにタンスを置いて、そのタンスが動いたから、その後ろに、サボテンが落ちこんでしまっていたのです。

また、食器は殆ど割れていました。足の踏み場のない状態でした。

今、よく思うのですが、私はどうやって今の状態に部屋を戻したのだろう。本当に、あの時はすごかったんです。

北区の私の部屋で、あれだけでしたから、下の方はもっとひどかったと思います。

それから、母ともなかなか連絡がつけられませんでした。電話がつかないのです。電話がつながった時は、うれしかったです。長田区のいとこの家に電話がつながった時は、相当時間がたっていたと思います。

水や電気のごとは、大丈夫でした。

その後、下の方の避難所で過ごす人達をテレビで見ました。



みんな、すごく、がんばってました。

あの地震のことを忘れる人は、絶対にいないと思います。

# 兵庫県南部地震

英文学科2年 崎山 有歌子  
(伊丹市在住)

## 1. 17日の私

「16日の朝早うから5日間ほどお姉ちゃんの引越し、手伝いに行ってくるから、いつもみたいに留守番たのむわ。ちゃんとガスの元栓とか、しっかり点検してから寝てね。ああ、8時になったら宿泊先から電話するから。これ、お母さん達の泊まる所と電話番号、何かあったら」

私の成人式の日母が私にこう言った。しかし、そのころは確か、滋賀県で路面凍結のために事故が多発して、関東へ抜ける道路が閉鎖され、車では通れない状態だったので、両親は日にちをずらそうか、どうしようか、とぼやいていた。

しかし、15日の夜に閉鎖が解除になり、予定通り行こう、と、16日未明に両親揃って私の姉が下宿をしている東京へ車で行った。

母親の言った通り、16日の晩、几帳面にも1分も変わらず、8時ジャストに電話をかけてきた。

「もしもし、あ、お母さん？そう、無事に着いたの。どう？私？別に何ともないけどね。戸締り、わかってるって、ガスもね、はい、はい。お姉ちゃんによろしく言っといて。じゃ」

電話を切ると、眠くなる前に、と思ってすぐに戸締りや元栓のチェックをして、さっさと二階にある自分の部屋にいった。

自分の部屋のベッドの枕元に私の目覚し時計がある。6時にセットしておいた目覚ましは鳴るはずの14分前の事。5時46分。

0.1秒目から、自分の体はまさにフライパンの中で転がされて炒られる銀杏だった。頭が混乱していた。と同時にこの境遇の訳がわからず、理屈をむやみに捜して、地震に対して思わず説教調に叫んだ。が、声になっていなかった。

「何だよ！ どうしてよ！ 早く止まってってば!! 聞いている!? 早く止まってって言うてるやんかぁ！」

実際に揺れた時間は、ほんの僅かであったらしいが、私の体の中の時計は、約5分、

いや10分というかなり長い時間のように感じていた。でも、次の瞬間には不思議なくらい、私は落ち着いていた記憶が残っている。「そう、こういう時には、まず…」と、無意識のうちに外への窓を一つ開放し、皮ジャンパーをはおった。一度目の地震がおさまった時に、頭の中をある映像が写っていた。考えたわけではないので文字として頭に浮かんだのではなく、反射的な映像という形で頭に浮かんだのである。そのある「映像」とは、私が小学校の廊下に同じクラスの友達と一緒に二列に並んで、頭に座布団をのせて担任の先生に誘導してもらっているもの、そう、今思えば、避難訓練の映像だった。

小学生の時は、訓練がある日は、授業が中断されるためにうれしくって、校長先生の言葉も小学生の私にはあまり現実味がないので、何も考えずに参加していたため、覚えが薄かったにもかかわらず、日常の記憶として表に出てこなかったものが、危機に直面して私を守ってくれたのだった。

地震発生当時、まだ私は寝ていたので、当然家中のすべての電気のスイッチは切っていたし、外が暗いといっても朝方の5時、街灯が消えていて、ライフラインの一つである電気がストップしたことにすぐには気がつかなかった。自分の命を守ろうとすることと、無事だったことへの安堵だけで精一杯だったからでもあると思う。パニックの私をまったく被災していない人が見たら、おそらくサイレントムービーよりもさぞかし滑稽な様だったろうと思う。

一人で留守番をしていた私は、揺れがおさまったと同時に外へ出て、自分と同じ種の動物、ヒトという動物の仲間に出たいと思った。私の思考は完全に動物的になっていたのが自分でもわかっていた。自分以外のヒトという動物は、この状況下でどう行動しているのだろうかと思った。一瞬本能がむき出しになった自分の行動が異常なのではないか、と恐ろしく思った。

その時、はっと気がつく自分の足元に振動を感じた。それが、余震だったのか、自分自身の体だけの震えだったのか、どちらかわからなかった。

そして、真っ暗の中に一つだけ明りを見つけた。その光は動いていた。誰かが懐中電灯をもっているらしかった。わたしはその光に昆虫が吸い込まれるように近寄って、見ず知らずの男性に、「すみません」と声をかけた。その方は2人のお子さんをもつ、30歳くらいの男性だった。その男性は、「貴方さえ嫌でなかったら、私の家族と一緒にいただけいたらいいですよ」と言ってお子さんの手をひいた奥さんに私を預け、少し離れた駐車場に置いてある彼のワゴン車の中へ行くように言った。深くお辞儀をして、有難うございますとお礼を言ったが、まだ恐怖で十分に声が出なかった。

彼らは偶然、前日の晩かなり遅くに海釣りから帰って来たところだったので、ワゴ

ン車の中には、毛布などが残っていた。そのおかげで日が昇るまで、寒さに悩まされることがなくてすんだ。いや、それよりも、そのご家族の優しさが毛布以上にとても暖かかった。

日がようやく昇り始めてひとまず、「自分の家に戻ります、本当に有難うございました」、と今度は声を出してお礼を言い、家に戻った。が、家に入れぬ。どうしても私の足が嫌がって一歩も動いてくれない。「家＝地震の起こる所」と無意識のうちどこかで思い込んでいるためか、どうしても拒絶してしまうのだった。

ようやく、庭にまでは入れるようになって、何時ごろだったか、時間の感覚は今でもまったく記憶がないのだが、初めて東京にいる両親に電話をしようとしたが、10円硬貨も100円硬貨もない。手元には、ただこんな時こそ無意味なテレホンカードが何枚もあるだけだった。しかし、いつカードが使えるようになるのか知れたものではない。公衆電話のそばで呆然としていたところに、中年のまったく見知らぬ男性が、一つのずっしりと重たい巾着袋を私に手渡し、「全部10円玉だから、使いたいだけ使いなさい」、と言ってくださったので、ご好意に甘えさせてもらった。

「お母さん、私、生きてる！」

自分の親にこんなことを電話で言ったのは生まれて初めてだった。

まだ私の両親は目が覚めていなかったもので、よっぽど私が寝ぼけているとでも思ったのか、すぐに電話を切ろうとした。私が、「テレビつけて！」というのと、父がテレビをつけたらしく、驚いていた。どれほど遠隔地にいる彼らを驚かせたのか、私は知る由もないが、おそらく大規模な地震の被害を報道するテレビに対し、否定の意味を込めて、自分の家は大したことがないに違いない、などと心の中で彼ら自身言い聞かせ、念じていたことだろう。

震源地は淡路島。私の家のある伊丹市はかなり離れていたもので、確かにわが家は大事なく、一部損壊に留まった。しかし、北側の民家は全壊だった。東に大きく傾き、その家の東隣の民家をいつ押し潰しても不思議でないほどだった。私は一人で留守番をしていて、家族の中で自分だけが今何とか助かれれば全員無事なのだ、だからこそ、自分をしっかり守らなければと思った。

日が昇ってあたりも日光で少々暖かくなり、私が一人で留守番をしていると知っていた親友Yさんは、電話が通じないので心配だと言って、車でわざわざ様子を見に来てくれた。そして、Yさんの御両親が、私の両親が東京から帰って来る迄は絶対に私達の家にいるように、と赤の他人である私を引き取って下さった。Yさんは家の戸締りや点検を手伝ってくれた後、通常私の家から車で約45分の所を、約3時間かけて家に案内してくれた。車でたった45分という距離の途中に、どうも戦争と平和を分ける

境界線があったかのようにだった。Yさん宅の付近では、17日その当日であるにもかかわらず、何事もなかったかのように人々は畑仕事をし、犬の散歩をし、自動車の路上教習をし…。

後になってずっと私が気になっていたことは、電気のブレーカーを落としてこなかったことだった。確かに、すべてのコンセントは抜いてきたし、火災の原因になり得るものはそれぞれ適当な処置をしてきた。が、その時、ブレーカーまでは気が回らなかったのである。水は所詮水浸し程度ですむが、ガスや電気はそんなものではない。火災を引き起こし、自分の家のみでなく、隣近所をも脅かす原因となる。もっと適切な判断ができるように常日頃から心がけたいとつくづく思う。

Yさんの家は川西市にあり、その中でも都市ガスの漏れによる避難勧告が出ていた地域から少し離れていた上、プロパンガスを利用していたので、ライフラインも都市ガス以外はまったく支障がなく、特に交通の渋滞等による不便以外、生活は以前とほぼ同様にできた。

私の両親が東京から伊丹に帰ってきたのは、21日の夜7時頃だった。Yさんの御両親に丁寧に挨拶をして、私の両親が待つ車にのって家に帰った。

家につくと、やはり私だけは家に入ることができず、ましてや被災した自分の部屋には1ヶ月ほどよりつくことはなかった。その間、一階に布団を敷き、パジャマに着替えることなく、日常着で横になり、睡眠不足の毎日が続いた。

風の起こすガタッという音に、猫のなく声に、車のブレーキの音に、すべてにおびえる日を幾日過ごしただろうか。今は、揺れに対しては免疫がある程度できたが、まだ音には驚かされる。

この体験記を書き始めた一昨日から、私の両親は彼ら恒例の2泊3日旅行に出かけているが、留守番一日目の晩には、再び17日の記憶が戻ってか、夢にあの地震のことを見て恐ろしい思いをした。今日の早朝に案の定、神戸で震度3、わが家周辺でも震度2の地震があった。いつまでこんな生活が続いてゆくのだろうか。

しかし、私にはどうしても人間の「第6感」と「運」が理解し難いのである。それは、前日ぎりぎりまで予定が定まらなかったにもかかわらず、両親は前もって避難するかのように東京へ行ったという例。どうしても、その日でなければならなかったはずはないし、両親の東京行きは2、3月の方が入試等による休講でむしろ姉の都合もよかったはずである。しかし両親は頑固にも、あの16日早朝でなければ、と言いきった。両親は予知していたかのようにだった。また、その前日に限って突然被災地に泊まることになり、命を落とすはずのなかった人が、不運としか言えない境遇に遭ってしまったという例…。

その上これからは、再び災害シーズン、台風シーズンとなる。まだ台風は予測が可能だが、地震がそれと重なって起きないという保証はまったくない。先の震災で惜しくも命を落とした人々が、生き延びた私達に課したのものや、残した無言の教えがいくつもあることを決して忘れてはならないのである。

## 2. ボランティア経験と実状とこれからと

震災から幾日もこんな毎日が続いていたが、私だけが被災者ではない。私は同じ被災者でもはるかに幸せな方であるということで、ボランティアに参加する決心をした。

外国語のできるボランティアを募集します、という記事が新聞に載っていた。その時はまだ大学の授業や後期試験の予定がどうなるかなどは、大学から公表されておらず、どうなるのだろうかと心配した。特に、私は既に一年留年しているということもあって、これ以上の留年は御免だし、どうあっても現在自分が所属している学年で卒業したかったので、日程が不明確な時点では参加するかどうか悩んだ。

私が参加したボランティア活動の対象は、在日外国人だった。特に、不法入国者、つまり日本での生活が基本的に認められていない外国人に重点が置かれた活動だった。私達は、そういった外国人の中にはまったく日本語が理解できないために、食料や毛布等の配給を知らず、彼らが人間として生きてゆけなくなることは、同じ人間という面で大きな問題だととらえたのである。また、そういった外国人は、各国の領事館や大使館に自分の不法入国が通告されてしまうのではないかと恐れて、表に現れない。また、滞在の認められている外国人については、安否情報を求めて各国からの国際通話も多々あった。そういった外国人のために、さまざまな語学のできる人がボランティアとして集まったのである。どの言語が求められても、そこにいる誰かが受けられる体制だった。英・仏・西・伊・露・蘭・独・中・朝鮮・ハンゲル…私達が今まで聞いたことのない名称の言語まで、ほぼ全言語に対応する人達が揃ったといっても過言ではないと思われるほどだった。

震災から少し経って、各大使館・領事館は、不法入国者についても今回は法的罰則の適用は別途扱うことにしたい、という見解を示したので、各地域の大小の公園、避難所、市役所、学校など、しらみつぶしに足を運び、私達が持つ最大限のアイデアを使って活動したつもりだったが、そこはやはり初心者のボランティア集団。毎日参加してくれるメンバーが違うので説明や事後処理に困難をきわめ、ひどいときには、次の日の活動に支障をきたすこともあった。

私は小学校1年生の頃からガールスカウト（略称GS）活動に参加しているが、

- ①常に共通のメンバーが数人集まってブレイン（リーダー）が存在すること。
- ②その日の活動人数、場所、活動内容がはっきり把握でき、それらの記録が残っていること。
- ③緊急時に共通の連絡先があること。

これらの基本があるお陰で、GSは効率よく、即座に活動ができているのだと思う。

1995年度定例学生総会で討論の一つに取り上げられたボランティア委員会の設置の件だが、各ボランティア活動希望者個人にとって、事務処理や責任がどうしても負担となっているらしかった。したがって、「神戸親和女子大学のボランティア委員会」といった角ばった形式で行わなくともよいと思う。まだ始まったばかりであるし、息の長い活動を求めるには、学生にボランティア精神が深く根付くまで、当分はボランティア活動の「神戸親和女子大学出張所」、つまり公用掲示板のアルバイト求人表のように、資料のみを掲示板等で提供する形式でもよいと思う。この場合、委員会的な要素はまったくなく、誰かがまとめ、会議を催したりするのではなくて、当日参加した人それぞれが、用意された一冊のノートに日誌をきっちりとまとめ、興味のある人がノートをいつでも見られるようにし、匿名で内容の批評ができるようにすれば、あまりそういった事務色の濃い委員会形式ではなくなると思う。

私達の大学が被災地「神戸」の名を名称に加えた事で、社会は私達になにかを期待することだろう。私達には、まだボランティア活動という導火線に火がようやくついた程度だが、親学会執行委員会の一役員として、学生として、また社会を構成する一人の女性として、考えてゆくべきことは沢山あるということである。

# 災害対策本部から復旧本部へ

学生部長 宮崎 和夫  
(垂水区在住)

災害対策本部設置から災害復旧本部へ改組するまでのことを800字で書けとのことであるが、それは到底無理である。阪神大水害、二度の大空襲を体験した私でも今回の大震災の経験は言語に絶するものであり、対策本部の記録だけでも大変な量であるからである。そこで、主な事項だけを列記する。

1月17日 拙宅の損壊状況から判断して大学の状況が心配されたが電話不通。いろいろコースを変えてみたが渋滞で通常の3倍の時間がかかり、9時半頃やっと大学に着く。すでに近辺の職員が登校し電話の対応に大わらわである。学長とは連絡不能だったが、連絡の取れた局長、館長と相談し、とりあえず17・18日を休校とし、明日、会議を開くよう手配。今後なにをやるにしても、学生・教職員の被災状況の正確な把握が必要と判断し、その掌握に全力を尽す体制をとったが、人手が全く足りない。

電気・ガス復旧、水道断水、トイレ使用不能。県警の知人と親友の消防局長を訪ね、その帰路、市内中心部を通過するがその惨状に驚愕する。

1月18日 早朝から電話なりやまず。6本の電話回線はパンク状況。対応に人手が足りない。学生課員と下宿確保に業者を回るが、鈴蘭台近辺は絶望的。神鉄を訪ね復旧見込みを聞くも、見込み立たず。2時半から第1回連絡会議を開催。学長を本部長、事務局長と学生部長を副本部長とする対策本部の設置を決定。直ちに審議に入る。学生・教職員の救護救済、施設設備、教育の復旧に関する3月末までの応急処置対策を基本任務とする。大学施設の被災状況（1～3号館は軽微、学生会館ホールの天井が落下）、交通状況等を検討。今月末までの全授業と補講を休講とすることなどを決定。

電話、FAXともに不通のため、局長と車で余震と落石の中を小部峠、六甲山縦走、表六甲ドライブウェイ経由で本部に連絡にゆく。帰路、神大に学生部長を訪ねる。交通寸断の中、早くも学生の組織的ボランティア活動が始まっていた。

1月19日 第1回災害対策本部会議を開催。特別入試の日程変更、臨時教授会の開催、被災者名簿の作成などを議決。連絡会議と本部会議を隔日に開くことにする。職員の方々、連日十数時間の勤務で疲労極限に達する。休むように指示するもガンバリ続けてくれる。

1月20日 神鉄三田～鈴蘭台間復旧、多くの方が出勤するようになる。問い合わせの



電話が減少し始めたので、大学側からの全学生を対象とした罹災調査を本格化できた。

大阪会議が開催され、多くの提案を頂く。猪木聡子先生の訃報入る。

1月21日 本部会議で大阪会議からの提案を審議。広報文、定期試験の中止、成績評価方法、被災学生の救護・支援対策等を協議。

鈴木弘美さん（国文三回生）の訃報入る。

1月23日 救護活動の機動性向上のため、バイク、携帯電話の購入を決める。「対策本部通信」第1号出る。

1月24日 学長声明文の原稿完成。職員の連日連夜にわたる大奮闘の作業の結果、在学生の90%の状況が判明。

1月25日 緊急全学集会・救援会を開催。地震発生当日以来本日までの経過報告と災害対策本部の施策を承認。学年末試験の中止、単位認定方法、特別入試・専攻科入試日の変更、二期入試と卒業式等は予定通り決行と決定。被災学生・受験生に対する特別経済援助策、下宿対策、交通対策等を審議。

罹災当日以来連日の職員の奮闘をねぎらう声しきり。「対策本部通信」2号出る。

1月26日 緊急教授会の決定事項を全学生に郵送する作業。全在学生の罹災状況判明。（100%達成）

1月27日 課長会議で出勤体制を見直す。

1月28日 二期入試までに完了をめざし、校舎修復突貫工事開始。

1月30日 連日、緊急連絡会と対策本部会の隔日開催を継続。特に入試課は、大阪・姫路会場等の収容人数を増加し、本学の人数を振り替え、受験生に連絡する作業、バスのチャータなど遺漏のないようにと連日深夜まで労苦が続く。「対策本部通信」3号出る。

1月31日 下宿開拓のチラシを10万枚自家作成。

2月1日 下宿開拓のハガキを神鉄沿線の父母・OGに発送作業。

2月3日 教授会（主として入試関係）

2月4日 特別選抜入試・専攻科入試

2月5日 二期入試・専攻科入試

2月7日 本学の特別経済援助に関する事務的具體策の協議。日本育英会災害特別奨学生募集。

2月8日 全員体制を取るとともに通常業務との調整も図るようにするため、災害対策本部を復旧本部に改組しようという案がまとまる。

2月9日 復旧本部・各班組織の案作成。

2月10日 教授会で震災復旧本部に改組することを議決。対策本部解散。

(櫻井先生の日記に、編集部で一部手を加えさせていただきました)

## 日記抄－阪神大地震

国文学科教員 櫻井 武次郎  
(川西市在住)

私の家は兵庫県と大阪府の境目にある川西市北部の新興住宅地にあります。被災地域の一つですが、我が家の被害は軽微でした。大地震当日からの日記をお見せします。

1995年1月17日火曜日

早朝、地震で目が覚める。町子（妻）も同時に目を覚ました模様。これは大きいと直感。町子や俊文（二男）が階下に安全に下りられるかどうか至急に確認する必要があると思って、パジャマのまま部屋の出口に向かう。「家長の責任」などというようなことを思ったようだ。向かいの部屋の俊文に声を掛けると、中から「オウ」という返事。暗闇の中、部屋の隅の机の前に立っているのが見える。出てこいというと、出られないと答える。書架が部屋の真ん中に倒れていて、それを越えないと出てこれない様子である。とにかく、早く部屋から出るように言い、階段を下りると、途中でガラスの破片を踏みつける。階段に懸けてあった額だと思い、ガラスに注意するように、町子に言って下りる。ビデオテープが散乱している。玄関に入れてあった犬（シロ）が鳴き出す。母の部屋の外に行き声を掛けると、小さな声で返事があった。これも、入り口に書庫の書架が倒れかかっている、なかなか出てこれない。

蝋燭を探し、玄関に置いてある蝋燭立てに灯をつける。母が部屋から小型の非常用懐中電灯を持って出てきて、各自で上にはおるものを探し、それから続けて仏壇の蝋燭立てに蝋燭をつけ、風呂場の蝋燭立てにも灯をとす。ラジオの乾電池を入れようとしたが、合う単2がなく、春に病院で使っていた単3の入る小型のラジオを捜し出してスイッチを入れる。戸棚が倒れる程度の被害だとニュースで言っているので、やれやれと思い、ウチへ取材に来たらもっとひどい状態を撮せるのにとか軽口を言っていたほどである。ガスストーブも灯油ストーブも停電では使えない。書庫に置いてある反射式の灯油ストーブを、何とか持ち出して暖を取る。着替える。意外に静かで、犬の散歩に出ると、向かいの集会所に集まっていた早起き会の人々が帰っていくところだった。八王子にいる浩一（長男）から電話。六時半に目が覚めて何故かふとTVのスイッチを入れたら地震のニュースをしていたので、これは何かあるのではないかと

電話をしたのだと言う。この時間帯は、まだすぐに電話が通じたのだが、後でなかなか通じにくくなる。

当時の記憶をたどってみると、どうもウォーというような地鳴りの音がして目が覚め、すぐにドーンと下から突き上げるような感じがした。この地震は大きいかというようなことと、昨年から群発地震が続いていた猪名川が震源地かなと咄嗟に思ったようだ。その間数秒のはずだが、その後横揺れがして（俊文に声を掛けたのはこの直後）、この揺れで書架が突き倒されたり棚の上のものが落ちたりしたようだ。ただ、あれほど大きな物が倒れたり落下したのだから、相当大きい音がしたはずなのに記憶がない。近所からの声も聞こえなかった。この点は町子も同じである。

明るくなってきたので、2階に上がって俊文の部屋を見ると、スチール製の書架2基と文庫本用の書架が俊文の蒲団の上に倒れかかり、枕は破れてしまっている。よく無事だったと今更ながらに思う。書架の上の方の本は、部屋の反対側まで飛んでしまっている。町子も数日来のギックリ腰なのに、咄嗟によく起きられたものだと感心したが、「火事場の馬鹿力」の話は後でいくつも聞くこととなる。

とりあえず、俊文とふたりで俊文の部屋の書架を起こし、本を棚に入れ、部屋の中を歩けるようにする。「オヤジの部屋はテレビが落ちている」と言われて見にゆくと、町子の枕の上にテレビがうつ伏せに転がっていた。危ないところだった。パニック状態になった近所の犬がシロの顔に咬みつく。

（中略）

午後に公衆電話で大学に連絡を取ったら簡単に繋がった。体育館のガラスが全部割れたほか、1号館の窓ガラスが割れた程度で被害は少ないということだった。来ることの出来る職員が集まって危険なガラスの除去作業をして、午前中に終了したという。家に帰ると、20分ほど前に電気がついたという。皆TVを見ている。ラジオで聴いて予測していたのとは全く程度の違う被害状態である。「知らぬが仏」というものであろう。合研の中村さんに電話を入れると、幸い無事で、これから実家に避難するところだという。田村本部長の家に電話を入れたら、本部長は本部へ行き、大学へも廻ったということだった。TVの報じる被害は、ますます酷くなっていく。

朝の間に京都の田原君（4回生）、続いて能勢の林君（2回生）から電話が入った。教員では大内田氏から安否を気遣う電話があった。なかなか電話が繋がらないが、親戚中、何とか無事であることが確認できた。夜の8時頃に田村本部長と電話で話が出る。大学は、ガラスが割れた他、講堂の天井が落ちていること、研究室の書架が倒れていることなど新しく被害状況を知らせて貰えたが、被害の比較的軽微な大学に対して六甲にある中高と本部の被害は大きいということだった。グラウンドには割れ目

が入り、連絡通路は落ち、校祖の碑が倒れている、裏手では生き埋めになっている人を救出出来ずにただ手をこまぬいている状態だとか、前のマンションは一階が潰れて管理人が即死したとか、生々しい情報である。本部の電話は着信のみ可能だという。なお、寮の学生についての報告はない。ないということは大丈夫ということだろう。

ガスで風呂を沸かして入浴中にガスが切れた。ガス漏れのために大和団地で避難騒ぎがあったが、その影響で川西市全域でガスの供給が停止された。余震が続いている。余震の不安の中で、俊文のみ階下に移して、いつものように就寝。寝込んでしまって余震に気づくのが遅れてはいけないので、早く寝るように言う。

18日、

大坪氏から電話、無事をよろこぶ。岩坪氏も無事とのこと。

家からの電話はほとんど繋がらないので、公衆電話まで行って大学に掛け、教職員の安否ならびに連絡のあった学生の消息を記すようにしておくこと、土曜日の特別選抜試験についてどうするか早く決定してほしいと頼む。入試委員長の田川氏が来て、入試課長の平田氏と相談しているということである。昨夜は近くの学生九名ほどが大学に泊まったという。学長には昨日から電話を掛け続けているが、大学にも連絡が入らず心配である。京都にいる御子息の福之さんにも電話を入れるが、受信音だけで繋がらない。唐井氏には電話が通じる。大学に電話をして戻ると菅野氏から電話が入っていた。すぐに2度目の電話があり、種々相談をする。方々からの見舞い、学生からの安全の報告が電話で入って来る。罹災した学生も多く、近隣府県の親類の家へ疎開するという連絡もある。何度も掛けてやっと繋がるという状態だという。4月から来てもらう三村氏は、心配な地域にお住まいだが大丈夫だった。金蘭短大に連絡したら、今日から平常どおりの授業だという。大阪と神戸では、近くなのに全く状況が違う。天国と地獄。

佐藤氏に連絡がやっと出来る。大学でも佐藤氏の話が分からないということだったが、地震の後にすぐに電話を入れたということだった。学長について知らないかと言ったら、昨日に福之さんに電話して無事だと確認したということだった。

国文学科の教員では、蔵中・鈴木・辻・小林の各氏の話がまだ掴めない。向こうも必死で連絡を取ろうとしているのだろう。とにかく無事であるようにと祈るのみである。大学に電話をすると、先だって学長から電話があったということで、山根氏が話を聞いたという。山根氏に、情報センターを設置して教職員と学生の安否の情報を集めるようにすること、大学に集まれる者だけで当面の方針を出すこと、それも、どうしましょうという相談では駄目でこうするという指令を出すようにしてほしいなど

と頼む。スーパーへ行くと、ラーメンなどの即席食料、水、乾電池などは売り切れている。プロパンガスのコンロを買おうとしたが、これも売り切れ。宣子（妹）から断水になるかもしれないと連絡がある。神戸に水を回すためにこちらで水が不足するのだという。デマがそろそろ飛び出した。出勤した暉ちゃんがプロパンのコンロをレンタル店で借りてきてくれる。被害の大きさは、時間が経過するにつれてはっきりとしてくる。予想をはるかに超えてしまっている。

夜、大学の平田氏、再度池田氏から電話で、28日まで休講、25日に教授会、21日予定の特別選抜入試は一期と同日か前日に行なうことに決めたと連絡あり。母は今日から余震に備えて脱出しやすいように座敷で寝ることにする。

19日。3日目になった。

菅野氏の提案で、東方面の教員で明日午後4時に梅田紀伊国屋前に集まり情報を交換することにする。井関・但尾両氏が十二時にこちらを出発して大学へ向かうという。井関氏からバレー部の学生は全員無事だったと聞く。櫻井ゼミの学生は連絡のつかないのが多い。

但尾氏に、学生の安否を記すリストがまだ出来てないようならすぐに作ってほしいと伝えるように依頼しておいたが、早速に実行しだしたということだった。昨夜に宮内氏が三田廻りで5時間かけて大学へ着いたという。水が出ないのは大学と一部の住宅だけ、食糧は不足していないという。（昨日、大学周辺の食糧が尽きてしまったという情報があった）

鈴蘭台に住んでいる甲南女子大の大高氏が親和女子大に行って見てきた様子を知らせてくれた。夜に入って、岩坪氏から、ゼミの学生は全員が無事、蔵中さんも連絡をつけることが出来て無事だと電話が入る。1日中、電話を掛けて方々へアクセスを試みている。1日2リットルの水で頑張っているようす。昨日は大谷女子大の入江氏、本日は金蘭短大の水田氏と、非常勤で来ていただいている方から電話があった。大学からは、すぐにハガキで連絡をしたということで、明日ぐらいには届くだろう。辻氏と電話で話をした人があったと誰かが言っていたという不確かな情報が入る。卒業生の福浦君から卒業生の誰彼の様子を知らせてくれる。知る範囲ではみな無事だったが、分からない者のことが心配だ。小林氏の所へ電話を何度しても発信音のみ。

八時頃、明日の会合の件で本部長の家に電話をしたらまだ帰らないという。その後、今まで比較的掛かりやすかった川西市の電話が通じなくなった。井関氏らは午後七時頃に大学に到着したと連絡あり。明日の会合の資料を作る。ずっと天気がよい。

1月20日は、震災4日目である。

佐藤和夫氏から、家が危なくなってきたので大阪に住む長男の明石君の家に疎開した旨の連絡あり。垂水から姫路へ出、山陰線廻りで大阪へ着いたという。方々から見舞い状が届く。

菅野氏からの呼びかけで、梅田に出てこられる者たちの連絡会議を持つことになった。梅田の阪急百貨店でパンが制限販売されていた。あとで聞いたことだが、新阪急ホテルではパン焼きに人員を投じていつもの3日分を焼いているが、それでも1時間で売り切れるといふ。上新で乾電池を買うことが出来た。

4時に梅田の紀伊国屋の前に集合。新阪急ホテルの今井氏（販売促進課）に場所の設定を頼む。食事をしながらの会合が費用が少なくて済むということで、アネックスの白楽天で3時間ほど話し合う。大学の動きが詳しく分からないことに皆のアセリとイラダチがある。疎開先から佐藤・堀田氏、風邪をおして中村さんら17人。尾藤氏にも菅野氏が呼びかけ参加してもらう。佐藤ゼミの鈴木君が倒壊した自宅マンションの中に埋まっているということ。

帰ったら、4回生の大谷君から無事の報告、3回生の豊留君に電話。福島君も無事という。大比賀局長から明日の対策本部会議に出て欲しいと電話。そのための資料（本日の会議の議事録）を作成。夜遅く、鈴木君が遺体で発見されたと菅野氏、続けて佐藤氏から連絡。

21日。今日も快晴。大高氏から鈴蘭台の様子を知らせてくれる。9時20分に近くの岩本さんの御主人の車に乗せてもらって神戸電鉄の岡場駅まで。そこから電車で鈴蘭台へ。思ったよりも混んでいなかった。途中で寿司屋の橋本さんが店を開けていたので寄ったら、きょうから営業を開始したという。仕入れは、朝早くだから中央市場まで楽に行けるとのこと。11時半前に大学に着く。研究室の書架は文庫本用のが倒れていただけ。ただし、東西両側の1本ずつがそれぞれ15センチほど前へずれて本が後ろに落ちていた。電気ポットが机の上にあったのは、すぐに各部屋を見回ってくれた何方かが元通りにしてくれたのだろう。そういう小さなことに嬉しく感じる。合研の中も本が散乱しているが、大きな被害はなさそう。学舎の所々に亀裂が走っている。カメラに収める。対策本部会議に出たが、大阪会議に出席した者と相当の認識の違いがある。震災以来、大学で連日直接に対応してきた人たちと少し離れた所でヤキモキしていた人たちとの違いだろうか。

# 震災体験、そして環境問題

本学非常勤講師 古武家 善成  
(灘区在住)

その夜は、学会の準備のために深夜2時過ぎに就寝した。講演要旨用の原稿をパソコンに打ち込み終わり、ほっとしてベッドにもぐりこんだその3時間半後、あの大地震が襲ってきた。

これまでも、軽い地震で眠りを妨げられることはあったが、「終わったな」と思う間もなくまた眠りに落ちることが普通だった。しかし、その時は違っていた。1995年1月17日午前5時46分、熟睡の底から暗闇の現実に戻された。妻が「わー」と大きな声をあげ、小学校2年生の息子が「こわい、死ぬのはいやだ」と抱きついてきた。その後の横揺れは、部屋全体を数10秒間にわたって大きく揺らせ続けた。「マンションが倒壊するのではないか」、沸き上がってくる恐怖を抑えながら、ベッドに座り続けるしかなかった。ベッドサイドのライトはつかなかった。揺れがすこしおさまりベッドから立ち上がって、足許の空間がやけに広がっているのに気が付いた。そこにはローボードタイプのボックス型家具が二段重ねで置いてあり、窓の大半を隠していたのだが、その窓が闇の中に薄白く浮かんで見えた。上段のボックスがベッドのすぐそばの床に半壊して転がっていた。

粉々に割れた食器の破片が散乱するダイニングや、本棚がひしゃげ崩れ落ちた書籍で埋まった書斎の光景に茫然としながらも、外の様子が気になって南に面したベランダに出た。灘区の高台に位置する私のマンションからは、六甲山と大阪湾に挟まれた南北3kmの狭い傾斜地に、阪急、JR、阪神の各鉄道や国道2号線、43号線、阪神高速等の幹線道路が東西に走り、その間を住宅が埋めつくす神戸市東部の典型的な夜景が見えるはずだった。しかし、夜景の中に“1,000万ドル”の灯りはなく、それに代わって10数本の火事の煙が視野いっぱい立ち昇り、西の空にたなびいていた。驚いたことに、煙の上に広がる空が淡紫色に白んでいた。それは真冬の6時前の空の色ではなかった。これが地震の発光現象だと思った。

「ガスの臭いがする」と言う外の声に我にかえり、引き出せた服をパジャマの上にあるだけ着込んだ。電池切れで携帯ラジオや懐中電灯は役に立たない。貴重品だけを持ち、子供の手を引いて部屋を飛び出した。幸い、外周りから見てマンションの損壊

はほとんどなかった。駐車場の車でカーラジオをつけて、ようやくニュースを聞くことができた。「震度6の地震が神戸、淡路島を襲い、大阪等でも震度5を記録。長田区で火災発生。東灘区青木付近の阪神高速道路が倒壊」と、アナウンサーの声は踊っていたが、その時の報道はその程度だった。しかし、空一面の煙を見た目には、被害はそんな程度ではとても済まないと思われた。そばの高台に上がって、そのことがすぐに明らかになった。私のマンションは親和女子中高等学校の近くにある。その瀟洒な建物の渡り廊下が無残に落ち、六甲山へと続く道路に面した8階建てのマンションが傾いていた。不安げに集まっている人々の所へ、バイクで街の様子を見てきたと言う神戸大生がやってきて話した。「阪急より下の木造住宅の大半はぐちゃぐちゃになっています」

1時間後には、それが事実であることを自分の目で確かめることになった。大阪の母親の安否確認のために、通じている公衆電話を求めて、街をさまよわなければならなかったからである。半壊、全壊した住宅がいたる所にあった。1階の潰れた住宅の2階が道路の真ん中までせり出し、アスファルト舗装はいたる所で割れ、歩くことを困難にしていた。そして、毎日通い慣れたJRの駅がなくなっていた。高架の2階にプラットフォームがあり1階にはブティック等の店舗が入っていた駅舎は、1階部分が完全にひしゃげ、2階部分の外壁に取り付けられていた「六甲道駅」の看板が目の高さにあった。駅北側の商店街では紅蓮の炎がアーケードを突き破っていた。

電気、水道、ガス、電話のすべてが止まった我が家を捨て、神戸大学の食堂に2日間避難していた。須磨区の東部にある勤め先の兵庫県立公害研究所に行ったのは、電気が通じたため家に戻った3日目からだった。鉄道をはじめすべての公共交通手段は使えず、道路は大渋滞を来していた。灘区から須磨区までの15.6mの道を自転車で行くことにした。その途中で、震災の被害の状況をつぶさに見ることができた。神戸一の繁華街である三宮駅界隈はゴーストタウンと化していた。中ほどの階が押し潰されてなくなった市役所や交通センタービル、窓枠が歪みガラスがすべて割れ落ちた新聞会館、X型の亀裂が壁面を覆い、コンクリート支柱から鉄筋がはみ出したビル、ビル…。特に、駅北側は華やかな飲み屋街だっただけに、アーケードが落ちすべての建物が傾き崩れかけている目の前の光景との落差は、すさまじいばかりだった。大火のあった兵庫区、長田区では、爆撃された街とまったく違わぬ風景が広がっていた。焼けた地面、飴のように曲がった鉄骨、赤茶けた鉄の色をさらした自転車の残骸。そんな中に、煤で真っ黒になったコンクリートの建物が影のように立っていた。そこは、全壊した我が家から逃げ切れずに生きながら焼かれた人達の、怨念の場所でもあった。



周囲の地面が30cmも沈み、建物全体が少し「へ」の字に曲がってはいたが、研究所の建物は何とか無事だった。もっとも、近くを通る阪神高速の橋脚は見事に折れており、所の内部も悲惨な状態だった。公衆電話での連絡で概略の様子は聞いていたが、どの部屋も入ることができないほどの損壊状態とは思っていなかった。出勤できなかった2日間の間に倒れたロッカー等が起こされていたので、研究員室にはそのまま入ることができた。しかし、実験室では、入口の所から床に積み重なった実験器具、機器、資料等の山を越えて入らなければならなかった。室内には酸、アルカリ、有機溶剤の鼻をつく臭いが充満していた。倒れた薬品棚を避け実験台の上を飛んで、ようやく自分の実験機の所にたどりついた。そこは、自宅の書斎同様、実験機の上に組んでいた本棚がふっ飛び、あらゆる書物、文献、資料が散乱していた。容器が割れて流れた酸の海に本が浸かっていた。電気が点かないために3時頃には薄暗くなってしまう室内に、換気のために開け放たれた窓から寒風が吹き込んだ。

死者6,300人、負傷者38,000人、家屋の全・半壊焼24万棟、被害総額10兆円と言う戦後最悪の災厄を私達にもたらしたM7.2の兵庫県南部地震は、環境にも大きなインパクトを与えた。交通の大渋滞に伴う自動車排ガス量の増加、損壊ビルの解体作業による粉じんの増加やアスベストの飛散、火災、野焼き等によるダイオキシンの発生、下水処理場の機能停止による大阪湾沿岸の汚濁、地下水の変動で生じた河川のヒ素汚染等々。

しかし、これらにも増して気になったのが、環境問題に対する人々の意識の低下だった。神戸市では、これまでもゴミの分別収集に対して十分な対応がなされていたとは言えないが、震災後はそれさえもまったく停止した。その後分別収集が復活しても、資源リサイクルへの市民の意識はなかなか元に戻らなかった。震災ガレキの野焼き問題は、自治体全体としての環境意識の低下を表しているとも言える。環境問題の分野からは少し外れるが、禁煙の場所でもタバコを吸う人が、震災後相当の期間目立った。このように、緊急事態に直面して環境問題への人々の意識、モラルが低下したと言う事実は、途上国の環境問題を考える上できわめて示唆的である。確かに非日常的な状況に陥った時、それに対する回避行動が最優先で取られることは当然である。しかし、その時に、人々が人類全体に緩慢な死をもたらす環境破壊の問題について、それを意識から脱落させた行動しか取れないとすれば、これまで精力的に取り組まれてきた「環境教育」の成果はどこへ行ったのだろうか。地球規模の環境問題の中で、途上国の問題はきわめて重要な課題である。途上国の環境問題を解決する上での困難さが、

この震災体験で浮き彫りにされた。「環境教育」の真価がこれまで以上に問われている。

# 猪木さんのこと

本学非常勤講師 井上 正子

猪木さんが亡くなってからもう何カ月も経つのに、たまに「あ、これは彼女に相談しとかなきゃ」と思うことがある。その度に、ああ彼女とはもう会って話すことができないのだと思い知る。

最初に会った時、彼女は一生懸命書類に地図を書いていた。声をかけた私に笑顔で答えながら、「こんなところに住んでいるんですよ」と手を止めて見せてくれた、その地図の整然としてきれいだったこと。随分と几帳面な人だな、私とは大分違うな、というのが第一印象だった。その年の学内定期演奏会の教員演奏は私の番だったが、そのころの私はといえば、子供のことでとても難しい問題があり、心身共に落ち込んだ状態だったので、人前で弾くということは普段以上に気の重い仕事だった。当日にもかくにも舞台を終え、楽屋で着替えもせずぼーっとしていると、何かの用で飛び込んできた猪木さんが、私を見るなり「ブラーヴァですよ、先生！ とってもよかったです。来年は私の番なのに今からプレッシャー感じちゃいますよ」とにぎやかに、手をとらねばかりにねぎらってくれた。その時、なんて人の心にまっすぐに入ってくる人なんだろうと驚かされた。私の子供のことなどは何も知るはずのない彼女のひとことが私の胸にしみわたり、とても慰められたことを覚えている。それまでは、冷静で明晰な人という印象が強かった彼女を、また違った角度から見直すきっかけになった出来事であった。

たまたまその次の年度から彼女と組んで、授業を持つことになった。指導計画を作るために、何回も話し合い、あれこれ準備をするうちにも、彼女の有能さが随所に発揮され、私がそれに感心すると、「私って昔から計画を立てるのは得意なんですけど、計画倒れに終わっちゃうことが多いんです」などと控え目だったが、そういう事が苦手な私にとっては、とても頼もしく、ひとまわりも年下の彼女におんぶにだっこという状態だった。なにかあるたびに「おねえさまー」と頼っていくと、「なにがおねえさまーですか」とにらまれ、それでも気持ちよく、てきぱきと仕事を片付けてくれた。私から猪木さんへのFAXの書き出しはいつも「聡子おねえさま」だった。

彼女のひととなりを知るごとに、私とは持っている音楽も性格もかなりちがっていることが分かったが、お互いにやしきたかじんのファンだった。ことに彼女はたかじ

んを「私の人生の師匠」と呼んではばからなかったほどである。一緒に行ったコンサートでは、たかじんは次から次へと息をつく暇もないほど例のしゃべくりと歌で埋め尽くし、私達を本当に楽しませてくれた。彼の一生懸命さというものが、舞台を通してこちら側に痛いほど伝わってきて、ちょっとした感動だった。彼女はと見るとハンカチで涙を拭っていた。私はその時少なからず驚いたが、たかじんのことを「人生の師匠」と仰いでいる彼女の気持ちがよく理解できた。一途なのである。彼女も。

独奏に伴奏に協奏曲にと幅広く活動していた猪木さんだが、私が聴いたのは残念ながらそのうちのほんの数回でしかない。しかし、シャープなひらめきを持つ少し硬質な演奏は、彼女そのものであり、年齢を重ねることによって、より素晴らしいものになるだろうということは明らかだった。

彼女がどう変わっていくのか楽しみにしていただけに、それを見届けられなくてとても残念である。

「歳月は慈悲を生ず」という誰かの言葉がある。どこかの文学碑に刻まれた言葉であるらしい。いつでもどんな場合でも、残されたものは辛い。忘れるのも覚えているのも辛い。いつか、あの震災であとに残されたすべてのものに等しく「歳月は慈悲を生ず」であって欲しいと心から願わずにはおられない。

最後に 聡子おねえさま また会う日まで さようなら

# 猪木先生の思い出

児童教育学科2年 生 澤 奈津子

私は大学でピアノの個人指導があると聞いた時、とても不安だった。

もともと人前でピアノをひくのは好きではないし、大学の先生は高度なレベルのことを要求されるのではないかと思って、初めから必要以上に緊張していた。

第1回目のピアノの授業で、猪木先生に初めてお会いした時、第一印象は「きびしそうな先生」という感じだった。しかし、実際に会話をしてみると、にこやかで話しやすかったので、「もしかしたらピアノのレッスンもやさしいのだろうか」と思った。いよいよ本格的なレッスンが始まった。猪木先生のやり方は、「同じレベルの人が2人ずつペアになってレッスンを受けると、お互いに影響しあうので上達が早くなる」というもので、私も、それはもっともだと納得した。それに、友人が横にいと、緊張もいくらか抑えられて、やりやすかった。しかし、先生の指導はけっして甘いものではなく、「この曲はどういう構成になっているか」とか「この曲のイメージを言葉で説明しなさい」など、難しい質問をされて、初めはとまどってばかりいた。それでも、曲のイメージをつかむことによって、感情も込めやすくなり、また作者がどのような思いでその曲を作ったかなども考えたりして、今までと音楽に対する見方が変わり、いい勉強になった。

猪木先生は厳しさもあったが、温かさもあった。私はピアノがそんなに得意ではないので、先生が納得されるようにはなかなか弾けず、また失敗も多かった。それに、失敗したときに思わず「あっ」とか「わー」とか叫んでしまう悪いくせがあった。そんな時、先生は「さわがしい子ねえ」と言いながらも笑って下さったし、よくおまけもして下さって、本当にうれしかった。

そんな猪木先生がもうこの世にいないということを、私は今になっても信じられない。先生が亡くなったと聞いた時、私はぼう然とし、次の瞬間には涙があふれ出てきた。あの時の胸のつまったような感覚は今でもはっきりと覚えている。先生が私に話された最後の言葉は、「すてきな曲が弾けるといいわね」だった。まさかそれが最後になると思わなかった。それから、何回弾いてもまちがってしまい、イライラしていた私にかけて下さった、「完璧にひける人なんていないんだから、80%の力を出せたらそれでいいの」という言葉は、忘れられない。その言葉に私はどれだけ救われたか

わからない。猪木先生との会話や思い出は、これからもずっと私の心に残っていくと思う。そしていつか、「すてきな曲」を弾けるように、がんばっていきたい。

# 猪木先生との思い出

児童教育学科2年 石野 順子

私がこの大学に入り驚いたのは音楽（声楽・器楽）に対する熱心さだった。個人のレベルに応じて個別指導をする。熱心さに感心する一方、多少の恐怖感があった。私は決してピアノに自信があるわけではない。いったいどんな指導をうけるのか、少し恐れながらピアノ室のドアをたたいた。そこには黒ぶちメガネをかけ、ニコッと笑う猪木先生がいらっしゃった。第一印象はどこか親しみをもてる感じだった。実際、思っていた通りの人だった。先生のレッスンの仕方は他の先生方とは違い、同じレベルの人と同時に部屋に入りレッスンをする指導法だった。大学に入りまだ慣れない緊張感と個別指導への恐怖でいっぱいだった私にとって、その方法はとてもリラックスできる形態だった。猪木先生の授業は決して易しいものではなかったと思う。音の1つ1つまでこまかく注意されたことは印象に残っている。「自分が弾いている音は音ではない。その音では子どもたちはついてこない。子どもたちが歌ったり踊りたくなる音で弾きなさい」と言われたときはショックだったが、改めて教師への甘さとピアノへの甘さを考えさせられるよい機会となった。

先生は厳しかったがそればかりではなかった。あまり練習ができてなくうまく弾けなくて、ワーワー騒いでいるといつも横で一緒になって笑ってくれた。うまく歌えない時は一緒に歌ってくれた。始めは緊張感でいっぱいで、鍵盤にふれる手が自分でもわかるほど震えていたが、次第に緊張がほぐれていった。

その矢先に阪神大震災が起こった。今でも鮮明におぼえているが、悪夢のような出来事だった。震災直後は自分のことで必死で周りの状況が見えていなかった。震災から数日後、友人から猪木先生の死を聞かされた。しかし、いくら聞かされても信じられなかった。その後、学校からの手紙で猪木先生の死が本当なのだと実感した。震災から10カ月ほど経つが、まだどこかにいるのではないかと思い、死が信じられないでいる。

猪木先生には1年間しか習っていないが、数多くのことを学んだ。今、教えられたことを注意しながら弾いているが、もし先生が生きていたらまだまだ指導されるだろうと思う。素敵な教師になり、子どもたちの前でピアノを弾いている姿を猪木先生に見てもらいたいと思う。

# 猪木先生へ

児童教育学科2年 一野 美穂

改めて、ピアノをみて頂いたお礼もきちんといえないままのお別れとなってしまいました。

私はbクラスといっても、いつもちゃんとひけずに、先生に大変御迷惑をおかけし、本当に、すみませんでした。

けれど先生はいやな顔ひとつせずにもいつも笑顔で接してくださいました。

つたない指使いで出す音にも、適切なアドバイスをやさしい口調で教えてくださいましたね。

本当にありがとうございました。

少しくらいまちがえても、先生は「テストの曲になったらこまるから、もう一度練習しておいてね」と一言言って、マルをくださいました。

私は練習でちゃんとひけて「やったぁ、これでマルになる」と思っても、先生の前でひくと、どうしても緊張して指が固まってしまうのですが、先生は何度もひき直す私をやさしく見守って下さいました。本当にうれしかったです。

「丁寧に弾けましたね」といいながら、マルをくださる先生は、本当に私にとって女神様でした。

けれど、練習の不十分な曲は、「もう一度がんばって練習してきて下さいね」と、まちがった部分に印をつけてくださいました。

2週間に1度の少ない授業なのに、たくさんたくさんご迷惑をかけました。

それを、にこにこ適切に対処して下さい、ありがとうございました。ピアノ室の小さな部屋で、緊張のあまり、プリント類を部屋中にバラまいてしまったこと、覚えていらっしゃいますか？（笑、あの時は大爆笑でしたね）あの時、ピアノの下に入りこんだプリントを、時間もないので、後でひろいますという私の言葉をききながらも、ピアノをうごかして、一緒にひろってくださいました。

あの時、私の顔は真っ赤だったと思います。

色々な思い出がうかんできます。

私は、今、2回生となってまたピアノをひいています。

ピアノの腕はあいかわらずです。



けれど将来は先生になりたいという夢の実現に向けてがんばっていきます。  
どうか先生、あのやさしい笑顔で見ている下さいね。  
がんばりますから。  
短い間でしたが、ありがとうございました。

天国の猪木先生へ 私のお礼の気持ちが少しでもとどくことを祈って。

# 鈴木弘美さんを偲んで

国文学科4年 秦 麻里子

1月18日、テレビで中継されていた倒壊したマンションは、鈴木さんの家ではないかという一報が入った。時たましか写らないその場所をテレビで確認しても、私は鈴木さんの家を知らなかったの、ほとんど信じられない、という状態であった。時間がたち、正確な情報が入ってくるにつれ、信じなくてはならなくなってきたが、何十時間ぶりに、男の子が救出されたというニュースもあり、何とか助かってほしいという一筋の望みを残していた。その後実家（大分県）に帰省していた私のもとへ、遺体発見の連絡が入ったのは、20日の夜のことだった。この震災によって鈴木さんの御家族は、鈴木さんを含め、お母様、弟さん、妹さんの4人が亡くなり、お父様だけが残された。4人のお葬式は、お父様の実家である横浜で行われた。同じ神戸市に住んでいながら、被害の状況はテレビでしか見ることができず、悪夢の中にいるようでほとんど実感できないまま過ごしていた私は、何とか鈴木さんに一目会って、きちんと現実を捉えたいと思い横浜へ向かった。4つの遺影に4つの棺が寄り添うように並べられてあり、その横では、一番辛いはずのお父様がき然として座っておられた。それを見た時、意志に反して涙が止まらなかった。鈴木さんの遺体とは対面することができなかったが、考えてみればそれは当然のことで、今思えばその方が良かった。もちろん死顔は、生前の鈴木さんそのままであったと聞いていたし、ショックを受けることはないと分かってはいたが、何より私には、鈴木さんの笑った顔だけが鮮明に残ったからである。棺の中に入れる手紙を書いている時も、お葬式の帰りに皆で思い出話をしている時も、生前の彼女の人柄によって、私たちは泣くことより笑うことの方が多かった。学校が始まって、知らない人からも声をかけられたり、本当にたくさんの方が鈴木さんを思っていたことを強く感じた。辛い時、自分が嫌な人間になりそうな時、鈴木さんのことを思い出せば、立て直そうというエネルギーがわいてくる、鈴木弘美さんは、私たちにとってそういう存在となった。